
黒の組織との決戦！！そして・・・

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の組織との決戦！！そして・・・

【Nコード】

N4629A

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

コナンと哀は、黒の組織に捕まってしまった！！蘭達が2人を助けに向かうが、そこには悲しい結末が待っていた・・・

囚われたコナンと哀・・・新たなる新メンバー

夏のある日、1人の少年と1人の少女が米花町を歩いていた。

少年の方は、工藤新一・18歳。少女の方は、宮野志保・19歳。新一「あれから、もう1年たつんだな・・・」

志保「ええ、あの事件からね・・・」

そう、2人は黒の組織との死闘に生き残ったのだ。

たった1人の仲間を失って・・・。

その犠牲者は、毛利蘭だった。

あの日、コナンと哀はいつものように、帝丹小学校から帰る途中だった。

あの時、普通に帰っていれば、こんな事にはならなかった。

そう・・・寄り道さえしなければ・・・。

それは、工藤優作と工藤有希子の灰原哀誘拐騒動から1ヶ月たち、

コナンと哀が恋人同士になって数日後の事だった・・・。

哀「ねえ工藤君、この指輪キレイだと思わない？」

コナン「欲しいのか、灰原？」

哀「え・・・そんなつもりは・・・」

コナン「じゃあ、オレが買ってやるよ。」

哀「え？」

コナン「今日は、オレ達2人が出会った日だからな。何かプレゼントしようと思ってたんだ。」

哀「工藤君・・・ありがとう・・・」

コナンは、指輪の代金をレジで支払って、贈り物用にリボンを結んでもらった。

コナン「はい、灰原。」

哀「ありがとう・・・」

哀は箱をランドセルに入れ、2人は宝石店を後にした。
まもなく、2人は人気のない道にさしかかった。

哀はふるえて、コナンにしがみついていた。

哀「工藤君・・・何か出そうで怖い・・・」

コナン「大丈夫だ、何が出ててもオレがオマエを守つてやる！
???」何が出て、か・・・それがオレ達でもか？」

その声に、コナンと哀はビクツとなった。

その声の主は、まぎれもなくジンだった。ウオッカもいる。

ジン「やつと見つけたぜ、新一、シェリー・・・」

コナンは哀を後ろ手でかばった。

コナン「ジン・・・今日こそ、オマエとケリをつけ・・・」

ジン「フフフ・・・この人数に勝てるのか？」

コナンと哀はハッと辺りを見回した。

するとジンとウオッカ以外にも4、5人の仲間が立っていて、完全に囲まれてしまっていた。

ジン「シールド、ボルドー、キュラソー、バーボン、アマレット。

やれ！！」

ジンに名前を呼ばれた5人の構成員が、いつせいに2人に飛びかかってきた。

さすがのコナンと哀も、多勢に無勢だった。

抵抗もむなしく捕まれ、口にハンカチをあてられてしまった。

コナン・哀「ううっ・・・！！！」

2人は気を失ってしまった・・・。

その1時間後、毛利探偵事務所に電話がかかってきた。

小五郎「はい、毛利探偵事務所・・・」

ジン「毛利蘭に代われ。」

小五郎「蘭、電話だぞ。」

蘭「はい。」

蘭は受話器を取った。

蘭「はい、もしもし・・・」

ジン「毛利・・・蘭だな・・・？」

蘭「あ、はい・・・そうですね・・・」

ジン「明日の午後4時、廃校になっている聖学院高校に会い・・・もし来なければ、大切にしていた子供2人が死ぬから、そのつもりでな・・・」

電話が切れた後、蘭は頭をヒネった。

蘭「お父さん、廃校になった聖学院高校って、どこにあったっけ？」

小五郎「ん？そうだな、確か、大渡間だったと思うが・・・」

蘭「大渡間か・・・それにしても、子供2人って・・・？」

小五郎「ま、まさか、コナン達か！？」

蘭「た・・・大変だわ！！！」

その頃、ジンの愛車ポルシェ356Aは杯戸町を走っていた。ジンの車の助手席には、ウォツカが座っている。

ジンの車の後ろにいるのは、スバルだった。運転しているのは、ジンにアマレットと呼ばれた女。助手席にはバーボンという男、後部座席にはボルドーという男とシードル、キュラソーという女が座っている。

ウォツカ「しかし兄貴、あの女本当に来るんですかい？」

ジン「もちろんだ。オレ達には今、人質がいる・・・コイツらを捕らえていれば、あの女の方からやって来るさ。」

そう言くと、ジンは後ろを向いた。

コナン・哀「ん~~~~~~~~、ん~~~~~~~~！！！」

後部座席には、両手両足をロープで縛られているコナンと哀が寝かされていた。

2人とも必死にもがいている。

園子と真まで立っていた。

園子「蘭！私と真さんにも、話してもらわよ！！」

蘭「園子！！京極さん！！どうして・・・？」

真「30分前、園子さんと店であなたを見かけたんですよ。」

園子「あなた、浮かない顔していたし、あんな顔見たら何かあったって思うわよ！！」

そのカンも、蘭の長年の親友だからこそなのか。そればかりか、なんと英理まで来ていたのだ。

英理「あなた、私にも話してよ！！」

小五郎「え、英理・・・！！」

英理「急に外食の約束をすっぱかすんだもの、何かあったんでしょ？」

英理もさすがである。

蘭・小五郎・英理・平次・和葉・園子・真「博士！！！！」

博士もついにおれて、やっとみんなに全てを話した・・・。

2人が小さくなった事と・・・2人の本当の名前・・・APT X 869という毒薬が原因だという事・・・それに黒の組織という犯罪組織が関わっている事・・・そして、哀がコナンと両想いになった事・・・全ての話が終わった後、蘭が口を開いた。

蘭「そうだったのね・・・」

小五郎「オレ達の知らないところで、大変な事になっていたのか・・・」

園子「コナン君と哀ちゃんがねえ・・・」

英理「あなた、早く新一君と志保ちゃんを助け出さないと！！」

小五郎「うむ、そうだな・・・しかし、オレ達だけでは数が少ない・・・」

平次「捜査一課に電話して、目暮警部達を呼ばんと・・・」

???「それなら、オレ達が呼んでおきましたよ・・・」

声がする方に蘭達が振り向くと、新一と蘭に似た2人が立っていた。蘭「あなたは・・・？」

快斗「黒羽快斗と申します・・・それと、お供の青子です・・・」
蘭「わ・・・私にそっくり・・・」

青子「私達、米花町で買物をしていたんです。そしたら快斗が、コナン君と哀ちゃんを見かけたのでついて行って、塀の上からのぞいていたら、黒ずくめの男達が2人を車に押し込めて、連れ去って行ったんです・・・」

快斗「すぐにオレが超小型発信器を取り付けたから、追跡はできませんけどね・・・」

青子「前にコナン君にもらっていたらしいんですよ。」

平次「そうか、後は目暮警部達を待つだけだな。」

1時間後、目暮警部達がやって来た。

目暮「毛利君、待たせたな。」

目暮警部の他に、高木、佐藤、由美が来ていた。

阿笠博士は地下にこもって、何かを作り始めた。小五郎達は完成するまでリビングで待たされる事になり、その間に目暮達も真相を聞かされた・・・。

同じ頃、ジンのポルシェ356Aとアマレットのスバルは、廃校になった聖学院高校に着いていた。

ジン「やっと着いたか・・・」

ジンはアマレット達にコナンと哀を運ぶように命じた。

アマレット達はコナンと哀を運び出し、牢屋まで連れて行くと、2人を中に入れて、鍵を閉めた。ガチャリ・・・。

アマレット「30分たったら、看守が来るわ。それまで、おとなしくしているのよ。」

そう言い残すと、5人は牢屋をあとにした・・・。

コナン「灰原、オマエ、ハサミか何か持ってないか・・・？」

哀「持ってないわ。他に役に立ちそうな物は、縛られた時に全部取り上げられちゃったの・・・」

コナン「ダメか・・・灰原、オレ達どうなっちまうのかな・・・？」
哀「ジン達の会話からして、明日の4時頃までは大丈夫だと思うの。
でも・・・その後は・・・」

コナン「殺されるかもしれない、か・・・」

哀「うん・・・」

コナン「灰原、ゴメンな・・・」

哀「え？」

コナン「オレがちゃんとした道を通ってれば、誘拐される事もなかつたのに・・・」

哀「謝るのは私の方よ・・・指輪が欲しいって、寄り道さえしなければこんな事には・・・」

哀「愛してるわ、工藤君・・・」

コナン「オレも同じだよ、灰原・・・」

縄でつながれたままで、2人はキスをした。

コナン・哀「ん・・・」

30分が経過し、看守が1人やって来た。

???「食事の時間よ。」

コナンと哀は、あわよくばこの看守を閉じ込めて逃げ出そうとまで考えた。だが、この看守は変わった女だった。なぜかこの女はコナンと哀の縄を解き、2人を拘束状態から解放した。

???「早く食べなさい。ジンが、何か食べさせないと体に毒だ、
つてね・・・」

コナンと哀は、おながが空いていたせいか、数分で全部食べてしまった。

考えてみれば、捕まっつてすぐに縛られて、2時間以上何も食べていなかったから、おながが空くのは当然か・・・。

コナンと哀は、少し赤面気味だった。

2人は食事後、すぐに両手を後ろに回され、手錠をガチャリとかけ

られてしまった。

コナン「これでまた、縛られた状態に逆戻りか・・・」

哀「うん・・・」

「???」「これからは、アタシが見張りを務めるから、逃げようなんて思わないでね。」

コナン「逃げるつもりはないよ・・・」

哀「どうせ逃げ出しても、すぐに捕まっちゃうものね・・・」

アニゼット「いい心がけね。アタシの名前は、風魔^{フウマ}雷^{ライ}薙^{イチ}。コードネームはアニゼット。よろしくね。」

コナン「ボクは工藤新一・・・」

哀「私は宮野志保よ・・・」

アニゼット「フム・・・。でも、まさか本当に小さくなった子がいるとは思わなかったわ。ジンから、薬に副作用の可能性があるかもってのはしつこく聞かされてたけどね・・・」

哀「雷薙さんは、普段組織で何をやってるの?」

アニゼット「そうねえ・・・暗殺とか、牢屋の看守とか、そんなトコ。でも、もう組織を抜けようと思ってるの。」

コナン・哀「え?なんで!??」

コナンと哀は、驚きながら聞いた。

アニゼット「だってアタシ、なかば強制的に暗殺をやらされてたし、それに・・・アタシのお姉ちゃんを・・・たった1人の肉親を殺したのよ・・・アイツ・・・ジン!!!」

コナン「じゃあ、なんでもっと早く逃げようとしなかったの?」

アニゼット「逃げられないのよ・・・アタシの左腕に、コレがあるかぎり・・・」

そう言くと、雷薙は左腕のソデをまくった。

コナン・哀「!!!」

コナン「こ、これは・・・!!!!」

哀「呪いのタトウ・・・!?!」

アニゼット「コレは雷縄印といって、ジンに付けられたの。組織に

反した行動をしようとする、この雷縄印が反応して、まるで雷を帯びた縄で縛られているような激痛が走るの・・・」

コナン「つまり、それを解くには、ジンを殺さないとダメって事か。」

哀「そういう事ね・・・」

アニゼット「でもアタシ、この命に変えてもあなた達を守るわ。」

コナン「君、どうしてそこまで・・・？」

アニゼット「アタシの腕の雷縄印は、元々アタシの一族に伝わる秘術の呪いだったのよ・・・。それを、ジンに頼まれたとはいえ不注意で教えてしまった・・・だからアタシは、命に変えてもジンを倒す！！」

哀「でもどうするの？」

アニゼット「そうね・・・とりあえず、アタシが外にいる時にいる考えるわ。もう監視時間も終わる頃だし。」

バーボン「アニゼット、ジンが呼んでいる。出る。」

アニゼット「わかったわ、待ってて、バーボン。」

そう言くと、雷薙はコナンと哀にヒソヒソ声で話しかけた。

アニゼット「実はアタシ、アイツとつき合ってるのよ。」

コナン・哀「え、そうなの？」

雷薙は顔が赤くなった。

外に出た雷薙は、ジンの待つ部屋に向かった。

アニゼット「ジン、入るわよ・・・」

ジン「来たか、アニゼット。」

アニゼット「ジン、何の用？」

ジン「たまには、仕事以外の事かもしれないと思ってな。」

そう言くと、ジンは雷薙をベッドに押し倒した。

アニゼット「あら、殺人ばかりで寂しくなったの？」

ジン「そうだな・・・オマエは特別な女だから・・・」

そう、雷薙がつき合ってる相手とは、ジンなのだ。

その彼を、彼女はあざむき、殺そうとしている・・・。

ジン「他のヤツの調子はどうだ？」

アニゼット「順調よ。ジン、一言あなたに言っておきたいんだけど。」

ジン「ん？なんだ？」

アニゼット「新一君とシェリーを甘く見ると、足下すくわれるわよ。」

ジン「フツ・・・そうだな。まあ、しっかり作戦は考えてあるさ。」

雷薙は黙っていた。

コナンと哀は、今はまだ牢屋に閉じ込められている。

しかし、彼らは信じている。蘭達が必ず助けに来てくれる事を・・・。

そして、阿笠博士が地下にこもってから、3時間が経過しようとしていた・・・。

救出作戦・・・突入！新たな仲間達

コナンと哀が黒の組織に誘拐されてから、約6時間が経過しようとしている。阿笠博士の家には、毛利蘭、毛利小五郎、妃英理、鈴木園子、京極真、服部平次、遠山和葉、黒羽快斗、中森青子、目暮十三、佐藤美和子、高木渉、宮本由美が集結していた。

阿笠は、地下室で開発した新型探偵アイテムをみんなに渡した。所持者と新アイテム説明は、以下の通り。

蘭ー強化版腕時計型麻醉銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・キック力増強シューズ・どこでもボール射出ベルト・強化版探偵バッジ

小五郎ー強化版腕時計型麻醉銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・強化版ランプ銃・強化版探偵バッジ

英理ー強化版腕時計型麻醉銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・強化版ランプ銃・強化版探偵バッジ

園子ー強化版腕時計型麻醉銃・腕力強化バンド・キック力増強シューズ・強化版伸縮サスペンダー・どこでもボール射出ベルト・強化版探偵バッジ

真ー強化版腕時計型麻醉銃・腕力強化バンド・キック力増強シューズ・強化版伸縮サスペンダー・どこでもボール射出ベルト・強化版探偵バッジ

平次ー強化版腕時計型麻醉銃・強化版伸縮サスペンダー・キック力増強シューズ・どこでもボール射出ベルト・分離型竹刀・強化版探偵バッジ

和葉ー強化版腕時計型麻醉銃・腕力強化バンド・キック力増強シューズ・どこでもボール射出ベルト・強化版伸縮サスペンダー・強化版探偵バッジ

快斗ー強化版腕時計型麻醉銃・強化版ランプ銃・強化版伸縮サスペンダー・キック力増強シューズ・どこでもボール射出ベルト・強

化版探偵バッジ

青子ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・キック力増強シューズ・どこでもボール射出ベルト・強化版伸縮サスペンダー・強化版探偵バッジ

目暮ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・分離型竹刀・強化版ランプ銃・強化版探偵バッジ

佐藤ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・分離型竹刀・強化版ランプ銃・強化版探偵バッジ

高木ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・分離型竹刀・強化版ランプ銃・強化版探偵バッジ

由美ー強化版腕時計型麻酔銃・腕力強化バンド・強化版伸縮サスペンダー・分離型竹刀・強化版ランプ銃・強化版探偵バッジ

強化版腕時計型麻酔銃ー麻酔針の効力をアップし、30発も撃てるようになった。補充も可能。

強化版伸縮サスペンダーーサスペンダーの耐久力が上がり、伸びる長さもアップした。

腕力強化バンドー腕力を強化できる強力なリストバンド。蘭や小五郎だけでなく、腕に自信のない人でも扱える万能品。

強化版ランプ銃ー快斗が持っていたランプ銃を改造し、パワーアップしたモノ。麻酔効果が含まれている。

分離型竹刀ー鉄製の強力な竹刀。1本から2本の竹刀へと分離させて操る事ができる。1本の時には、真ん中のボタンを押す事で盾にもなる。

強化版探偵バッジー受信範囲が広がった、探偵団バッジ。仲間との交信に使用。

博士から探偵アイテムを受け取った蘭達は、突入の際のチーム決めをした。チームは以下の通り。

Aチームー蘭、平次、和葉、快斗、青子

Bチームー高木、佐藤、由美、園子、真

Cチームー目暮、小五郎、英理

そしていよいよコナンと哀救出のための作戦会議が始まった。

同じ頃阿笠は、ある場所に電話をかけていた・・・。

そう・・・アメリカに・・・そこにいるのは、あの人物達・・・！！

一方、こちらはコナンと哀が監禁されている聖学院高校である。

コナンと哀は両手に手錠をかけられ、牢屋に閉じ込められていた。

コナン「灰原、オマエ、あの5人の構成員の事なにか知らないのか？」

哀「知ってるわ。今から、説明するね・・・。シードルは暗殺専門の女性で、たまに誘拐などの任務を任されているの。幼い頃に組織に引き取られてから、地獄の訓練を受けてきた暗殺のエキスパートよ。アマレットは科学分野にも貢献していて、ジンにも一目置かれてる女性なの。出勤の際は運転を担当しているけど、普通の戦いも得意だわ。ボルドーは本当は女だったんだけど、恋人をFBIに殺された事によって彼らを恨んで、組織に引き取られた後は殺しの訓練を受けて女を捨てたの。別名はキメラよ。キュラソーは最年少の16だけど、殺しの腕は組織のなかでも5本の指に入る実力を持つてるの。作戦を立てるのが上手だけど、仲間にもあまり本心を明かさないわ。バーボンはおオッカの弟なんだけど、兄と違って慎重派ね。愛用の銃トカレフを使いこなすわ。シードルとできているんだけど、おオッカはこの事を知らないらしいわ。」

コナン「オマエ、よくそこまで覚えてるな・・・。」

哀「毒薬の膨大なデータを覚えるよりは、こっちの方が数倍覚えやすいのよ。」

コナン「そりゃそうだな・・・灰原・・・オレ達、助かるのかなあ・・・。」

哀「何言ってるのよ！蘭さんは必ず私達を助けに来てくれるわ！信じましょー！」

コナン「そうだね・・・。」

????「フン、はたしてそうかしら？」

その声にコナンと哀はすぐ反応した。声の主は、ベルモットだった。
哀「ベルモット・・・!!!」

コナン「どういう意味だよ？」

ベルモット「言った通りよ。そう簡単にあなた達を助け出せると思う？」

哀「あなた、蘭さんの実力をなめてるでしょ？」

ベルモット「確かにあの子の力はスゴいわ。でもね、組織の構成員はチェスの駒でいうポーンクラスだけでも70人はいるのよ。それにルーククラスが50人、ビショップクラスが30人。そして、強力なナイトクラスが私も含めて13人。もう結果は見えてるわね。」

コナン・哀「ナイトクラス？」

ベルモット「そうよ。私、ウォツカ、シードル、バーボン、ボルドー、キュラソー、アマレット、アニゼット、コロン、キャンティ、私も名前を知らないのが2人、そしてジンで13人。」

哀「それだけ？」

ベルモット「ハア？」

哀「蘭さんはきつと、毛利さんや目暮警部達を連れてくるわよ・・・全国の警察が総動員してやって来れば、200人は軽く越すわ。」

コナン「組織の構成員はオマエ達全員で163人。そしてボスが1人。200人以上と164じゃ、勝負は見えてるよ。」

ベルモット「うるさいわね、黙ってなさい!!!」

ベルモットはコナンと哀の口にガムテープを貼り、口を塞いでしまった。

コナン・哀「ん~~~~~ん~~~~~ん~~~~~!!!」

ベルモット「クールガイとシェリー、あなた達なにか勘違いしてるみたいだけど、私達ナイトクラスの実力は、下級兵とはワケが違うのよ・・・それにボスの力もケタ違い。そして側近としてもう1人・・・クイーンクラスのパンドラがいるのよ。」

コナン・哀「んんんん!?（パンドラ・・・!!!?）」

ベルモット「そうよ、伝説のパンドラ。彼女は恐ろしい力の持ち主。

警察なんて足下にも及ばないわ。」

そう言うと、ベルモットは2人のガムテープをはがし、牢屋から出て行った。

5分後、雷薙がやって来た。

アニゼット「新一君、シエリー、昼ごはんよ。」

哀「もうそんな時間？」

アニゼット「あなた達、結構熟睡してたからね。ここに来てから、20時間はゆうに過ぎてるわよ。」

コナン「雷薙さん、少し聞きたい事があるんだけど。」

アニゼット「何？新一君。」

コナン「あなたは、13人のナイトクラスの1人なの？」

アニゼット「どうしてそれを・・・」

哀「ベルモットがさっきまでいて、話していったのよ。」

アニゼット「そう・・・確かに、アタシはナイトの1人よ。でももう組織を裏切るつもりだし、ルークとビショップの何人かも、力を貸してくれるって言ってたわ。」

コナン「どうやって説得したの？」

アニゼット「クスッ、大人のみりょくよ！」

哀「さすがね・・・」

コナンと哀は、驚いた。その時、雷薙の携帯電話が鳴った。

アニゼット「はい、もしもし・・・ああ、ジン・・・え？すぐに来ていつて？」

ジンと対等に話している雷薙を見て、コナンと哀はさらに驚いた。

アニゼット「はいはい、今そっちに行くわよ！おとなしく待ってなさい！」

コナン「雷薙さんって、ジンと対等に話せるんだね・・・」

哀「私なんか、スゴく怖いのに・・・」

アニゼット「人間誰しも弱みがあるもの。弱みさえ握っちゃえば楽勝よ。」

そう言うと、雷薙は牢屋から出て行った。

アニゼット「ジン、来たわよ・・・」

ジンは雷薙が入ってきたとたんに、彼女をベッドに押し倒した。

アニゼット「ジン・・・質問してもいい？」

ジン「何だ？アニゼット・・・」

アニゼット「もしアタシが組織を裏切って、あなたを殺そうとしているとしたら、どうする？」

ジン「フツ、オマエに殺されるなら、本望だ・・・」

アニゼット「ホントにそう思ってる？」

ジン「オレが今までウソをついた事があつたか？」

アニゼット「ないわ。」

ジン「だったら、オマエもオレを信じる。オレは、オマエを信じてるんだぜ・・・？」

アニゼット「ええ、信じるわ・・・」

ジンと雷薙は、熱いキスをした。

アニゼット「ジン、もうそろそろ蘭って子が来る時間なんですよ？」

ジン「ああ、あの娘の事だ、仲間も連れてくるだろう。丁重にもてなしてやるさ。」

アニゼット「163人も構成員いるんだから、これで負けちゃったら笑いモノよね・・・」

ジン「フフフ・・・それもそうだなあ・・・」

ジン・アニゼット「アハハハハ！！！！」

ジンは楽しそうに笑っている。雷薙は「ジンの笑顔が久しぶりに見れた」と微笑んでいた・・・。

それからしばらくたって、聖学院高校の前には蘭達が集結していた。またチーム名を書くのはめんどうなので、作者の勝手な都合上省かせていただく。

目暮「我々の目的は、この廃校のどこかに囚われている新一君と志保君を救い出す事だ！！！！昨日決めたチームごとに、一丸となって突破しろー！！！！」

目暮のかけ声と共に、13人は校舎内に突入していった。途中、ポイン兵、ルーク兵、ビショップ兵が数人出てきたが、蘭達は何の苦もなくなぎ払っていく。数分もしないうちに階段にたどり着いた。目暮「蘭君達は2階、園子君達は3階、ワシらは4階に行くぞ！」そう言つて、蘭達は別れた。

目暮、小五郎、英理は4階に着いた。そこに待っていたのは……。???「待ってたぜ、目暮十三、毛利小五郎、妃英理……」小五郎「オマエは誰だ!？」マンハッタン「オレの名はマンハッタン、黒の組織のナイトクラスの1人……」

同じ頃……3階に着いた園子、真、佐藤、高木、由美は、ボルドーと対峙していた。ボルドー「へー、男2人に女が3人か……まあまあだね。オマエ達も私のコレクションにしてあげるよ。フフフ……」園子「お、女……!？」

そして、蘭、平次、和葉、快斗、青子の前には、ウォッカがいた。ウォッカ「毛利蘭か……オレ1人相手に4人も連れてくるのは、

ちとセコいんじゃないか？」

蘭「卑怯なのは、あなたの方よ！」

和葉「そうや！！2人も人質とりよって！！」

平次「2人は今どこにおるん！？」

ウォッカ「アイツらは今、地下室だ・・・だが、見張りがいるぜ・・・」

快斗「だったら、今から5人で乗り込んで・・・」

ウォッカ「フン・・・ムダだな！！！」

そう言った瞬間、ウォッカは5人に強烈な打撃を加えた。蘭、和葉、青子は右に、平次、快斗は左に吹っ飛ばされた。

蘭「ぐ・・・立てない・・・」

ウォッカ「5人で乗り込むだと？笑わせる。オレ1人に手こずってるオマエらが、よくそんな言葉を言えるな？地下にはジンの兄貴だけじゃねえ、腕利きのスナイパーが数人控えてる。聞かせてくれ、どうやって2人を救い出すんだ？さあ、言ってみなー！！！」

蘭「く・・・うああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

和葉「大丈夫やで、蘭ちゃん・・・」

快斗「オレ達には・・・」

青子「仲間が・・・」

平次「おる！！！」

平次がそう言った瞬間、後ろの方から爆発音が聞こえた。見ると、壁に大穴が空いている。

ウォッカ「な、何だ今の爆発音は！？」

空いた穴の外には、小型飛行機が2台飛んでいた。ゆっくりと扉が開く。

???「見事ね。あなたの計算した地点に穴を空けたら、うまくいったわ。阿笠博士。」

阿笠「ウム、ありがとう、有希子君、優作君。このバズーカ砲を扱えるのは君達しかおらん。間に合ったぞ、蘭君。君のカバンに入っ

てる強力な発信機は、聖学院高校の場所を教えてくれた。さつき来た蘭君のメールは、ワシに情報を与えてくれた。蘭君が聖学院高校の中でワシに送り続けていたSOSは、仲間という光をここに連れてきた！！！！」

小型飛行機の中から、阿笠博士と合流した工藤優作と工藤有希子が現れた。

阿笠「そして、仲間はまだ4人。今回は、彼らも動いてくれたぞ・・・」

もう1台の飛行機には、FBIのジョー・スターリング、赤井秀一、ジェームズ・ブラック、そして本堂瑛祐が乗っていた。ジョー・スターリング「どうやら、間に合ったようね。」

赤井秀一「ああ、ヤツらの本拠地をついに突き止めた・・・」

ジェームズ・ブラック「瑛祐君、悪かったね・・・休日なのに引っぱり出して・・・」

本堂瑛祐「いえ・・・ボクもアイツらに殺された父と姉の仇を討ちたいですし、アイツには聞きたい事もありますから・・・」

ジェームズ「ではゆくぞ、ジョー君、赤井君、瑛祐君！！相手にとって不足はない！！！！」

ジョー・秀一・瑛祐「はい、ボス！！！！」

最強の仲間が今・・・現る！！！！

激突・・・黒の組織と命をかけた戦い

黒の組織に誘拐されたコナンと哀を救うため、蘭達13人は聖学院高校に乗り込んだ。しかし、待ちかまえていたウオツカ達に苦戦を強いられ、大ピンチに陥ってしまった。そこに、なんと優作やFBIが駆けつけた！！

現在、それぞれのいる場所は、以下の通り

4階 毛利小五郎、妃英理、目暮十三、マンハッタン

3階 鈴木園子、京極真、佐藤美和子、高木渉、宮本由美、ボルドー

2階 毛利蘭、服部平次、遠山和葉、黒羽快斗、中森青子、ウオツカ

1階 ポーン、ルーク、ビショップ兵数名

地下 モニタールーム ジン、アニゼット（風魔雷薙）

地下 待機室その1 バーボン、シールド

地下 待機室その2 キュラソー、アマレット、キャンティ、コル

ン、ベルモット、その他1名

地下 牢獄 江戸川コナン、灰原哀

地下 場所不明 あの方、パンドラ

聖学院高校上空 工藤優作、工藤有希子、阿笠博士、ジェイムズ・

ブラック、ジョディ・スターリング、赤井秀一、本堂瑛祐

蘭「どうやら、応援が来てくれたみたいね・・・」

ウオツカ「フン、そんなバカな事があるか！！上空から校舎に穴を空けるようなヤツが、どこにいるってんだ！！？」

瑛祐「ここにいますよ・・・」

ウォツカ「な、何！！！」

蘭「え、瑛祐くん！！？」

瑛祐「お久しぶりです、蘭さん・・・しかし今長話をしているヒマはありませんね・・・手早くケリをつけましょう・・・」

ウォツカ「ふ・・・ふざけるな・・・オマエのようなガキに、このオレ様がやられるかあ！！！」

ウォツカは叫ぶと同時に、瑛祐の方へ走ってきた。

蘭「瑛祐君、危ない！！！」

しかし、瑛祐は冷静を保っている。

瑛祐「運の悪い人だ・・・焦りさえしなければ、長生きできたのに・・・」

瑛祐は言うが早いか、一気にウォツカとの間合いを詰めると、ウォツカの腹に衝撃を加えた。

ドンッ！！！！

ウォツカ「オマエ・・・今、何をした・・・？」

瑛祐「八打はちふたです。一撃で相手を死に至らしめる8力所の急所。あなたもなかなか早かったですが、今回は相手が悪かったですね。」

ウォツカはそのまま倒れた。平次が近寄って、ようすを確認する。

平次「し、死んでる・・・」

瑛祐「さあ行きましょう、皆さん・・・」

蘭「う、うん・・・」

蘭達はウォツカを残し、先に進んだ。

そこに、ジンと雷薙が現れた。

ジン・アニゼット「ウォツカ・・・」

ジンと雷薙はウォツカの死を確認すると、なんと涙を流した。

ジン「オマエがいなくなるなんて寂しいよ・・・」

アニゼット「今まで、いろいろありがとう・・・」

そう、ウォツカはジンと雷薙が出会うきっかけを作ってくれた人物だったのだ。

ジン・アニゼット「さようなら・・・」

ジンは、ウォッカを抱えた。

アニゼット「さあ、ジン、行きましょう。ウォッカは地下で埋葬するわ。」

ジン「ありがとう、雷薙・・・」

アニゼット「初めて本名で呼んでくれたわね・・・ジン・・・」

ジンと雷薙はキスを交わし、地下へと急いだ。

3階では、園子達とボルドーが戦っているところにジェイムズ、ジヨディ、秀一が駆けつけた。

ボルドー「刑事つてのもたいした事ないんだね。ヒマつぶしにもならないよ。」

佐藤・高木・由美「くっ・・・」

ボルドー「鈴木財閥の令嬢なら、「ゴーストジュエル」の事は知ってるよな？」

園子「聞いた事がある！自らの体を犠牲にして願いを叶える事ができる禁断の宝石・・・！！ま、まさかあなた・・・」

ボルドー「その、持ち主さ！ダイヤショット！！」

ボルドーはそう言つと、腕からダイヤの弾丸を撃ってきた。

園子「速い！！！！」

園子はあつという間に傷ついていく。

真「そ、園子さん！！」

園子は片膝をついた。

撃ち終わったボルドーの腕は、人間の手ではなかった。

佐藤「何なのあの腕・・・機械！？」

高木「人間じゃない・・・？」

ボルドー「そう、私は人間を捨てたんだ。あの日から・・・」

ボルドーは、自分の過去を話し始めた・・・ベトナム戦争の元アメリカ軍戦闘員だった彼氏と今まさに結ばれようとしていた時、捜査

を担当していたFBIに彼氏が連れて行かれ、殺された事・・・そして自分も連れて行かれ、地獄の拷問を受けた事を・・・。

ボルドー「その数ヶ月後、私はなんとか彼らから逃げ出す事ができた。でも、近くの湖で顔を洗おうとした時に自分の顔を見て絶望したよ。私はもう、女ではなくなっていたんだ。」

ジョー「FBIがそんな事を！！？」

秀一「本当ですかジェームズさん！！！」

ジェームズ「ああ、本当だ・・・一部の連中だろう・・・大量虐殺をしたアメリカ軍への憎しみから、魔女狩りのな事をしていたのは同期のヤツから聞いている。アイツも戦争の犠牲者だ。」

ボルドー「同情なんていらなんだよ。刑事ども！！！」

同じ頃、4階では小五郎、英理、目暮がマンハッタンと戦っていた。

マンハッタン「ブローニング、タイプ1。いくぞ！！」

マンハッタンはいきなり拳銃を撃ってきた。

小五郎「ハアッ！！！」

小五郎は腕力強化バンドで弾丸をなぎ払う。

マンハッタン「なかなかやるな。小五郎！」

小五郎「テメエはこんな誰でも扱える銃使いやがって・・・なめてんのか？」

小五郎の顔は、刑事時代の顔に戻っていた。

マンハッタン「じゃあこんなのはどうだい？タグ爆弾！！」

マンハッタンは爆弾を取り出すと、小五郎に向かって投げつけた。

小五郎「なっ・・・」

爆弾は小五郎をそれ、英理に当たった。

英理「キャア！！」

小五郎「テメエ、最初から英理を狙ったな!!?」

マンハッタン「オマエや目暮は簡単につぶせねえからな!そっちの女ならいくらでもやれる。」

マンハッタンは、なおも英理を狙う。

マンハッタン「ナパーム・デス!!!」

強力な爆弾が、またも英理を狙う。

小五郎「テメエ・・・いい加減にしるよ・・・!!」

小五郎は、ナパーム・デスから英理をかばった。

小五郎「英理、大丈夫か?」

英理「あなた・・・ありがと・・・」

マンハッタン「その体を傷つけて妻を守るか、偽善者!しかしナパーム・デスでその程度のダメージとは、さすが元刑事だな。小五郎!!」

小五郎「オレが偽善者なら、テメエは卑怯者だぜマンハッタン!!」

マンハッタン「オレはテメエの怒りをとことん上げてえのさ。オマエは昔から何も変わってねえ・・・オレが家畜や動物達を殺してた時もオレをとがめたな。」

その声に、小五郎は驚愕した。

小五郎「おい・・・待てよマンハッタン・・・オマエ・・・オマエまさか・・・!!!」

マンハッタン「最初は気づかなかっただろ?オレさ。子供の頃オマエ達とつるんでいた・・・」

小五郎「久遠寺・・・烈火・・・!!?」

英理「私とあなたの・・・幼なじみ・・・」

マンハッタンの、知られざる過去とは・・・!!!?

3階に戻る・・・

ボルドー「だから私は彼の仇を討つために、この世を憎み夢み、黒の組織に入った。みるかい?」

ボルドーはそう言うと、ソデから機械の腕を出した。
ボルドー「これがダイヤショット、これはルビーバーナー。見なよ、この腕！コイツがゴーストジュエル！拷問によるボロボロの体にはよくないんだよ。ジンに会ったのは遅くはなかった。」

回想・・・

ジン「スバらしい才能を感じる。どうだ？本当に組織に入って、豚共を殺していかないか？しょせん能力のない人間なぞ・・・ただの家畜なんだよ。このゴーストジュエルと機械化の手術は、オマエのような女にふさわしい。強くなれ！名前を捨てろ！オマエは・・・キメラだ！！！」

ボルドー「死にものぐるいで、私は組織の訓練場でこの身を戦闘モードにしていた・・・何日も・・・何ヶ月も・・・何年も・・・そして・・・ナイトクラスになったのさ。」

園子「戦争は、憎しみしか生まないからね・・・でも私は負けるワケにはいかないんだ！！！」

園子は次々と攻撃を繰り返していく。ボルドーは応戦するが、数分うちに追い詰められた。

ボルドー「くっ・・・ここまでか・・・」

園子達が麻酔銃を撃つ前に、ボルドーは自分の腹を撃ち抜いた。ボルドーは倒れた。

園子「女としての幸せだけじゃなく・・・人間としての幸せも捨てちゃったんだね・・・」

園子達は絶命したボルドーを残し、先に進んでいった。

そして、4階では・・・

マンハッタン「思い出させてやるよ……オレ達の過去を……」

回想……

「やーい宿無し烈火！」

「死んじまえ！」

「町から出て行け！」

小五郎「やめろオマエら！！」

英理「何なら私達が相手になってやるわよ！！」

「やべえ、毛利と妃だ！！」

「アイツら、メチャクチャ強いぞ！！」

「逃げる！！」

小五郎「大丈夫か烈火？」

英理「アイツら、追い払ってあげたよ。」

烈火「助けなんていらなかったのに。ボクが弱いからいけないのさ。毛利や妃みたいに強くなればいいんだ。」

数日後、烈火が犬を殺した時……

小五郎「なんて事するんだ烈火！！」

英理「かわいそうじゃない！！！」

烈火「何怒ってんだよ毛利、妃。弱いモノを殺しただけだぜ？弱いヤツが強いヤツの犠牲になるのは必然なんだ。だからオレは強くなる。アイツら皆殺しだ。毛利と妃は許してやるよ。」

小五郎・英理「烈火……」

そして……6人の子供達が刃物によって切り刻まれる事件が町に起こった。犯人は久遠寺烈火と断定。しかしもう町に烈火の姿はなかった……。

小五郎「烈火……オマエ本当にあの時の烈火か！！？」

マンハッタン「そうさ小五郎。モニタールームでオマエと英理を見

かけた時は、正直うれしかったぜえ・・・しかしオレは黒の組織、オマエ達は敵の方・・・運命が3人を分けた・・・」

小五郎「それでもよ、オレに手加減するのはガラじゃねえ。なおの事、オマエはオレが倒すしかねえな!!」

マンハッタン「できるかな？小五郎。」

マンハッタンは、雷の弾丸を放つてきた。小五郎はそれをなぎ払う。小五郎「へっ!!全部壊してやったぜ烈火!!」

マンハッタン「その名前で呼ぶんじゃねえ!!オレは黒の組織のマンハッタンだ!!!」

一方、コナンと哀が監禁されている牢屋では・・・

アニゼット「いい知らせよ。蘭ちゃん達在中に来てるわ。」

コナン「ホント？」

アニゼット「ええ、それでね・・・」

ジン「アニゼット、悪い知らせだ・・・」

コナン・哀「ジン・・・」

アニゼット「どうしたの？ジン。」

ジン「ボルドーがやられた。もはやわずかな余裕もない・・・あの作戦を実行に移す・・・」

アニゼット「そう。じゃあアタシはちょっと別の用があるから・・・」

「
そう言うと、雷雫は牢屋をあとにした。

ジン「さあ、オマエ達2人も来い。あの方がお待ちだ・・・」

ジンはコナンと哀を抱え、どこかに運んでいった。

マンハッタン「オマエらはあの時・・・オレを見下してたんだ!!さぞ優越感にひたってただろうよ。オレ達は強い、オマエは弱いってな。オマエらは心の中でオレをバカにしてやがったんだ。」

小五郎「あのよう・・・オレはただ・・・オマエとダチになりたかっただけだぜ。烈火・・・」

マンハッタン「そんなデマカセ信じられるか!!どのみち、オレ達

はもう互いに別の世界にいるんだよ!!」

小五郎「・・・そうだな。久しぶり。そんでさよならだ!!」

マンハッタン「オレの最強の爆弾、デスファットマンで死にくされ!!」

マンハッタンはデスファットマンを小五郎に投げる。しかし小五郎は苦もなくかわした。

マンハッタン「なぜだ・・・なぜ当たらねえんだ!!」

小五郎「わからないのか? 烈火・・・」

小五郎は、マンハッタンとの間合いを詰めた。

マンハッタン「うつ・・・」

小五郎「オマエがオレ達との過去を話した事で、オレを傷つけにくくなっちまったんだよ・・・まだ良心が残ってたって事だな。そんなオマエに、殺人者はやっぱり似合わねえんだよ・・・さあ・・・お別れだ烈火・・・」

小五郎は、マンハッタンをつかみ上げた。

マンハッタン「うわっ!!」

小五郎はマンハッタンを投げ飛ばし、腹に渾身の一撃をくらわせた。ブンッ・・・!! ドカ!!!

マンハッタン「うわあああああああああああああああああああああああああーっ!!!」

マンハッタンは吹っ飛び、窓を突き破って落ちていった。転落していきながら、マンハッタンはこんな事を思っていた。

マンハッタン（小五郎よ・・・やっぱデメエは強えなア・・・英理さんがオマエを好きになった理由が・・・今やっとわかったぜ・・・あばよ・・・オレの一生の友達・・・）

マンハッタンは、体を地面に強打し即死した・・・小五郎は、涙を流していた。

小五郎「烈火・・・オマエは、オレの一生の友達だぜ・・・あばよ、親友・・・」

小五郎と英理は泣きながら、目暮と共にその場を立ち去った。

同じ頃、雷薙は聖学院高校の屋上にいた……。

アニゼット「マンハッタンの生命反応が消えた……どうやら彼も負けたようね……ところで……こんな所にアタシを呼び出して何の用かしら？ベルモット……」

ベルモット「あら、とぼける気？ウォツカにボルドー、そしてマンハタン……ナイトクラスの彼らが、あまりにもあっさりやられすぎて……誰かが情報を漏らしているとしたか思えないでしょ？アニゼット……」

アニゼット「それで、アタシが怪しいとにらんだ、か……なかなかできた推理ね……でも、他にもアタシをつけ狙う理由があるんじゃない？例えばジンの事、とか……」

ベルモット「ヘエー……わかつてるじゃないの……ジンは誰にも渡さない！！彼は……私のモノよ！！！」

アニゼット「50もいった年増のばあさんが、何言っただか……」

ベルモット「フン！！ジンの事はどうでもいいわ……あなたとは一度決着を付けたいと思っていたのよ！！さあ……殺してやるわアニゼット！！！」

アニゼット「フツ、そのセリフ……そのままあなたに返してあげるわ、ベルモット！！！」

女の戦い……勃発！！！！

女のケジメ・・・雷薙VSベルモット

黒の組織に誘拐されたコナンと哀を救うため、蘭は仲間と共に聖学院高校に乗り込んだ。待ちかまえていたのは強力な構成員達だったが、園子のチームはボルドーを討ち倒し、小五郎のチームはマンハッタンを討ち倒し、蘭のチームも本堂瑛祐の助けを借りてウォッカを討ち倒した。一方、牢屋に監禁されていたコナンと哀は、ジンによつて連れ出されていた・・・。

聖学院高校屋上では、雷薙とベルモットが対峙していた・・・。
ベルモット「あなたは、この私が倒す!!」

ベルモットはそう叫ぶと、雷薙に向かっていった。しかし、雷薙は苦もなくかわす。

ベルモット「なんで・・・？私の方が力があるのに・・・」

アニゼット「力つてのは・・・こういうのを言うのよ!!!」

雷薙は、ベルモットとの間合いを詰めた。そして、手をかざす。その手の動きは・・・速い。

ベルモット「うつ・・・この手の動き、逃げられない・・・」

アニゼット「風魔流忍法・雷撃波!!!」

ものスゴい雷の衝撃に、ベルモットは吹っ飛ばされた。

ベルモット「キャアアアアアッ!!」

アニゼット「気絶してるヒマはないわよ？雷撃波!!!」

ベルモットは雷薙にボコボコにされていく。

ベルモット「うう・・・なんてパワーなの・・・」

アニゼット「風魔流忍法・捕縛の雷縄!!!!」

雷薙のステッキから放たれたロープが、ベルモットの体にグルグルと巻き付いた。

ベルモット「キャアアア!!!うつ・・・動けない・・・」

アニゼット「ハアアアア！！！」

雷薙はベルモットを振り回し、投げ飛ばした。
ベルモット「イタイ・・・立てない・・・」

その頃、ジンに連れ出されたコナンと哀は、地下のモニタールームにいた。2人共イスに座らされ、縄でグルグル巻きに縛り付けられている。

コナン「あのベルモットが・・・」

哀「雷薙さんに押されてる・・・」

ジン「ああ・・・雷薙には、忍者としてのプライドがあるからな・・・ベルモットの力では勝てんだろう・・・雷薙に殺されるのがオチだな・・・」

コナン「それはいいけど、ジン、なんでオレ達をここに連れてきたんだ？」

哀「そうよ、人質なら牢屋に閉じ込めておけばいいでしょう？」

ジン「確かに、ただの人質なら牢屋に閉じ込めておけばいい・・・だがな、組織が調べた結果、オマエ達2人はある新薬の実験台にふさわしいヤツだったのさ・・・大切に扱わないと・・・」

コナン・哀「新薬の実験？」

ジン「新一、パンドラって知ってるか？」

コナン「それって、ベルモットが言ってたクイーンクラスの事？」

ジン「それはコードネームの1つだ。パンドラというのは、世界中に散らばっているビッグジュエルの中の1つにだけ入っている小さな宝石・・・別名「命の石」の事だ・・・」

コナン「それって、怪盗キッドが探している・・・」

ジン「そうか・・・キッドが探しているのか・・・新一・・・少し聞きたい事がある・・・怪盗キッドに扮しているのは、今は少年なんだろう？」

コナン「な、なんで・・・？」

ジン「やはりそうか。やけに身のこなしが軽いと思ったら・・・」

哀「ジン、怪盗キッドの事知ってるの？」

ジン「知ってるも何も、初代キッドの盗一を殺したのは、オレ達の兄弟組織だ・・・」

ジンの言葉に、コナンと哀は驚愕した。

コナン「そうだったんだ・・・だからキッドは組織を追っていたのか・・・」

哀「それよりジン、私達が新薬の実験台にふさわしいってどういう事？」

ジン「フッフ・・・それは、不老不死の薬・・・画期的な毒薬、「パンドラ」だ！・・・」

コナン・哀「ふ、不老不死の薬！！？」

ジン「新一、シェリー、オマエ達が飲んだA P T X 4 8 6 9は、もともと細胞を自己破壊する薬だった事は知っているな？そのプログラムの偶発的な作用で、神経組織をのぞいた骨格、筋肉、内臓、体毛、それら全ての細胞が幼児期の頃まで後退化する神秘的な毒薬・・・だがな、あの薬はまだ試作段階・・・完成品はすでにできているんだよ・・・」

哀「そんな！A P T X 4 8 6 9は、私がいなければできないはず・・・」

ジン「アマレットと雷薙が共同で開発して、1ヶ月前ついに完成したのさ、パンドラがな・・・」

コナン「それで、オレ達を薬の実験台に・・・」

ジン「新一、オマエは最初にあつた時からただのガキじゃないって思ってたんだ・・・あの時、毒薬を飲ませて殺したにもかかわらず、妙な違和感は抜けなかった・・・もしかしたらまだどこかで生きてるんじゃないかってな・・・オマエの存在に気づいたのは、杯戸シテイホテルの一件・・・ピスコを射殺した時だ。あの時、オレに刺さった麻酔針・・・銃で撃ち抜いた後、組織に針を持ち帰っていたのさ・・・そして、ベルモットがしくじったあの日、ベルモットに麻酔針を持ち帰らせて調べたら、あの時の針と成分が一致したんだ

よ・・・」

コナン「確信を持ったのは、あの暗殺未遂事件の時・・・かな？」

ジン「ほう、わかってるじゃないか・・・さすがだな・・・あの時、急にサッカーボールが飛んできたからな・・・おそらく、足に履いているそのシューズに何かカラクリがあるんだろ？」

ジンはコナンの足元を指さした。コナンはバレた、とうつぶいた。

ジン「さて、新薬の実験の事だが、オレ達がパンドラをオマエ達に投与して、何をするつもりなのかわかるか？」

コナン・哀「永遠の・・・人質・・・」

ジン「そうだ。オマエ達がパンドラの作用で不老不死になれば、死ぬ事はない。ずっとオレ達の人質になる事になる・・・さあ、おしやべりは終わりだ。オマエ達はここでおとなしくしててもらおう。」

ジンはそう言うと、コナンと哀の口に布を巻き、口を塞いだ。

コナン・哀「ん~~~~~~~~、ん~~~~~~~~・・・」

ジンはコナンと哀をそこに残し、モニタールームにカギをかけて出て行った。

屋上では、雷薙とベルモットの戦いが続いていた。

アニゼット「ハアア！！タアア！！！！アアアアア！！！！」

雷薙のたび重なる攻撃によって、ベルモットはボロボロになっていた。

ベルモット「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

アニゼット「魔性の女クリス・ヴィンヤードも、ここまでのような楽に死なせてあげるわ。あ、そうか。クリスじゃなくてシャロンだったわね・・・」

ベルモット「くっ・・・」

アニゼット「さようなら、ベルモット。」

その瞬間、聖学院高校屋上に閃光が走った。

駆けつけたジンの眼前にあったのは、力を出し切って疲れ果てた雷薙と、彼女の最大忍法を受けて絶命したベルモットの姿だった。

ジン「雷薙、オマエ・・・ベルモットを殺したのか・・・？」

アニゼット「これはジンのためよ・・・あの女が生きていたら、あなたを殺しかねない。アタシはあなたを守りたかったのよ・・・」

ジン「雷薙・・・愛してるぜ・・・」

そう言うのと、ジンは雷薙を抱きしめた。

アニゼット「ん・・・ジン・・・！！！！」

ジンはどさくさにまぎれて、雷薙の胸を触っていた。

アニゼット「ジ、ジンの・・・エッチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！」

ジンは雷薙に思いつきりほおをパーンとはたかれた。雷薙はジンにズイツと近寄る。

アニゼット「ジン~~~~~~~~？」

ジン「な、な、何だ？ら、雷薙・・・」

ジンの顔はもはや、いつもの冷酷さを失って、焦り気味である。

アニゼット「今度アタシに同じ事をしたら、あなたもあんな風になるわ~~~~~~~~？」

ジンが見た先には、すでに絶命しているベルモットの残骸があった。ジンは体に寒気が走った。

ジン「（ヒ、ヒ~~~~~~~~！！あんな風になりたくない~~~~~~~~！！！！）わ、わかりました、す、すいませんでした、ゆ、許してください、ら、雷薙様・・・」

アニゼット「わかればいいのよ・・・さあ、モニタールームに戻りましよ！」

ジン「あ、ああ、そうだな・・・（こ、怖い・・・）」

雷薙のあとを追いながら、ジンは思った。雷薙をもし怒らせでもしたら、自分はまちがいに、ベルモットと同じ末路を歩むであろうと・・・そう考えた瞬間、ジンはふるえていた・・・。

この分だと、ジンと雷薙が結婚できたとしても、ジンは雷薙のシリ

に敷かれそうである・・・。

一方こちらは、聖学院高校3階である。ボルドーを倒した園子、真、佐藤、高木、由美、秀一、ジョディ、ジェイムズの前には、組織のスナイパー、キャンティとコルンが現れた。

キャンティ「キャキャキャ・・・暗殺事件の時にアタイ達を邪魔してくれた、FBIの赤井秀一じゃないのさ！！仲間もいるみたいだし、今日は楽しめそうだねえ！！」

ジョディ「キャンティとコルン・・・志保ちゃんが言っていた、組織のスナイパーね・・・」

コルン「オマエ達・・・オレ達が今、ここで殺す・・・オマエ達、ここから先には行かせない。」

ジェイムズ「ならば・・・力ずくで通させてもらおう！！いくぞ、みんな！！！」

園子・真・高木・佐藤・由美・ジョディ・秀一「はい、ボス！！！」
キャンティ「キャキャキャ！望むところさ！！行くよコルン！！！」
コルン「返り討ちに・・・してやる・・・」

そしてこちらは、4階である。マンハッタンを倒した小五郎、英理、目暮、そして彼らに合流した優作、有希子、阿笠の前には、アマレットとキュラソーが現れた。

キュラソー「まさか、あのマンハッタンを倒しちゃうなんてね・・・ビックリだよ・・・」

アマレット「でも、アタシ達はそうはいかないよ。ウフフ・・・」
目暮「女性と戦うのは好きじゃないが・・・私達も負けられんから・・・」

小五郎「いくぞお、英理!!」

優作「有希子、覚悟はいいな？」

有希子「ええ、わかつてるわ!」

英理「任せて、あなた!!」

キュラソー「フン!!」

アマレット「あとで後悔しないでよ？」

さらにこちらは、2階である。ウォツカを倒した蘭、平次、和葉、快斗、青子、瑛祐の前には、新たな構成員、ギムレットが現れていた。

ギムレット「久しぶりね、瑛祐君・・・まさかこんな形で再会するとは・・・さすが、アタシの中学時代のライバルね。おもしろい、アタシも本気を出させてもらうわ。」

瑛祐「その声・・・日向琴美か・・・まさか、黒の組織に入っていたとはね。久しぶりに会ってなんだけど・・・君のその姿、昔のボクを見ているみたいでイライラするね。」

ギムレット「フン・・・相変わらず生意気な子だわ・・・だけど、前とは違うところがあるわね、瑛祐君。やけに体がボロボロになっているじゃないの・・・」

琴美の指摘通り、瑛祐の体はキズだらけだった。だが、瑛祐はウォツカ戦では一瞬でウォツカを倒したため、彼の攻撃など受けていないはずだが・・・。

瑛祐「FBIと合流する前に、「強いヤツ」と戦ってね・・・」

誇りを、あなたは一瞬にして砕いたのよーっ！！その時からアタシには目標ができた。強くなる他に、あなたを倒すという目標がね！！あなたにあの時負けたのは、あなたが、「私にはない何か」を持っていたからよ！！あなたに勝てば、その「何か」が手に入る！！敗北という汚点も消える！！その「何か」が手に入らずとも、あなたに勝てば、アタシとあなた、どちらが本物の「強さ」を持つてかわかる！！その決着を、今やつとつける事ができる！！よくぞこの時まで無事でいてくれた、本堂瑛祐よ！！あなたを倒す事で、やつと前に進める！！あなたを倒さねば、アタシの次の一步は踏み出せぬと思っていたのよ！！！！」

しかし、瑛祐は冷静を保っている。

瑛祐「・・・くだらない・・・」

瑛祐はそう言うのと、琴美の足を引っかけた。

ギムレット「何！？」

瑛祐「琴美よ、いつまで1人の敵にこだわってんだ！？」

瑛祐は、琴美を押し倒した。

ギムレット「キャアアアアアア！！！」

瑛祐「ボクを倒さないと、前に進めないってのは・・・琴美、君がまだ弱いからだ。」

ギムレット「何！？なんですって・・・アンタ！！？」

瑛祐「それに君は、昔のボクにこだわってるようだけど、昔のボクと戦っても何も手に入らないよ？あの時のボクは、ただのチンピラだったからね・・・「何か」が手に入る、「何か」が変わるきつかけをくれるのは、「コブシ」に力がある子じゃない・・・「ココロ」に力がある子なんだ・・・いくぞ！！！！琴美！！！！」

ギムレット「！！くっ・・・」

瑛祐はそう言うのと、琴美に攻撃を仕掛けていく。

瑛祐「オオオオオオ！！！！」

ギムレット「キャアア！！！！」

瑛祐「だああああ！！！！」

アアアアアアアアア！！！！」

琴美は、瑛祐の一点集中を受け、床に倒れ込んだ。

ギムレット「うう・・・あなた・・・強い・・・子と戦ったと言った・・・わね・・・？それは・・・いつたい・・・？」

瑛祐「君がさつき言ってたFBIの神童だ。2人のうちの1人、口ズゴート・バリーと訓練で戦い、倒した・・・」

ギムレット「まさか・・・あの・・・大人のFBIでも、かなわないう子達のうち・・・1人を！？アタシも・・・手が出せなかった子を・・・！？」

瑛祐「なぜ手が出せなかった！？力の差が歴然で、負けるとわかってたからだろ？それは君の強くなる意志がうすく、覚悟もできてなかったからだ。自分より一回りも二回りも強いヤツと戦い、得るものは大きいぞ・・・たとえば血みどろになり、死にかけようとな・・・ソイツの持つ力、戦い方、心の持ち方、全てが身にしてみても手に入る。吸収すればするほど、高いところが見えてくる。昔敗れた1人にこだわるなど、小さな事だ・・・ボクはもつと高いところへいく。帝丹高校での出会いをきっかけに、どんどん自分を高めていく。ただそれだけだ・・・」

器の違いが、強さの違い・・・！！！！

決戦！！黒の組織・・・悲しい犠牲

黒の組織に捕まったコナンと哀を助け出すため、蘭は仲間と共に聖学院高校に乗り込んだ。途中でFBIの3人と、本堂瑛祐、阿笠、優作と有希子が助けに現れ、戦いは蘭達が優勢になった。今のそれぞれのチームの状態は、以下の通り。

蘭側の状態 毛利蘭、毛利小五郎、妃英理、服部平次、遠山和葉、黒羽快斗、中森青子、阿笠博士、工藤優作、工藤有希子、ジェームズ・ブラック、ジョディ・スターリング、赤井秀一、本堂瑛祐

黒の組織側の状態 ジン（不明）、ウォッカ（死亡）、ベルモット（死亡）、マンハッタン（死亡）、ボルドー（死亡）、ギムレット（敗北）、アマレット（戦闘中）、アニゼット（不明）、シードル（不明）、バーボン（不明）、キュラソー（戦闘中）、キャンディ（戦闘中）、コロン（戦闘中）、江戸川コナン&灰原哀（監禁）、あの方&パンドラ（不明）、ポーン&ルーク&ビショップ兵（ほとんど敗北、うち数名は裏切って、雷薙についている）

2階には、蘭、平次、和葉、快斗、青子、瑛祐、ギムレットがいた。ギムレットこと日向琴美は、瑛祐に倒され、縄で縛り上げられていた。

瑛祐「蘭さん達は、先に行ってください！ボクも、後から追いつきますから！！」

蘭「う、うん、わかったわ。」

蘭、平次、和葉、快斗、青子は、瑛祐とギムレットをその場に残して先を急いだ。

瑛祐「琴美・・・」

琴美「フン、瑛祐君、何やってるの？アタシは負けたのよ？早く殺しなさいよ・・・」

瑛祐「悪いけど、人殺しは趣味じゃないんだよ。それにオマエとは同級生だろう？」

瑛祐は琴美と2人きりになったので、昔のようにオマエと言っている。

琴美「同級生、か・・・瑛祐君・・・アタシとんでもない過ちを犯してしまったみたいね・・・アタシ、最悪だわ・・・このまま死んだ方がマシよ・・・」

次の瞬間、琴美の頬に平手が飛んだ。

琴美「え、瑛祐く・・・？」

瑛祐「バカやろう！！何でそんな簡単に、命を捨てようとするんだよ！？姉さんもオマエも！！命つてのはとても大事なモンなんだ！！なくしてはいけない、大切なモンなんだぞ・・・！！！！」

瑛祐は涙を流している。

瑛祐「それに、オマエには死んでほしくない・・・幸せになつてもらいたいんだよ・・・オレのこの気持ち、オマエはわかんねえのかよ・・・！！！！」

琴美「え、瑛祐君・・・アタシの気持ち、気づいてるの・・・？」

瑛祐「え？おい、琴美・・・オマエまさか、オレの事を・・・？」

琴美「あ・・・そ、そうよ・・・アタシは、あなたの事が・・・好きだったのよ・・・」

琴美のいきなりの告白に、瑛祐は頬を染めて答えた。

瑛祐「なんだ、それなら早く言えばよかったのに・・・」

琴美「じゃ、じゃあ瑛祐君・・・」

瑛祐「オレもオマエの事が好きだ・・・何年先になるかわからないけど、もしよかったら・・・オレと結婚してくれないか？」

琴美「は、はい・・・！喜んで・・・！！」

瑛祐は琴美の縄をほどき、2人は抱き合ってキスをした。今ここに、新たなカップルが誕生した・・・。

さて、ここは3階。キャンティ、コルンと対決している園子組は、少しずつではあるが、彼らを追い詰めていた。

キャンティ「ハア・・・ハア・・・」

ジヨディ「終わりよ！！」

ジヨディの拳銃が、キャンティの腹を貫いた。

キャンティ「かはっ・・・」

ドサアッ・・・。

キャンティは絶命した。

コルン「キャンティ！！くそう、よくもキャンティを・・・これだけは使いたくなかったが・・・しかたがない・・・」

そう言うと、コルンはメガネを外した。

ジヨディ「な・・・」

秀一「義眼！？」

コルン「コイツは、サイコスコープ・キャノン。超能力を備えた、オレの最後にして最強の武器！！くらえ、キャンティの仇！！」
コルンは目のサイコスコープ・キャノンからミサイルを次々に発射してきた。

園子「わ、わ、わ！！！！」

コルン「ハハハハハハハハハハハハハハハハ！！死ね、死ね、死ねえ！！！！」

コルンはミサイルを乱射している。もう、完全に彼は狂っていた。
ドゴォ！！！！

秀一の放った弾丸は、コルンの腹を一撃で貫き、コルンは絶命した。
秀一「コルン・・・恐ろしい男だった・・・」

ジヨディ「キャンティのために最後まで戦うなんて・・・キャンテ

イとコルン、恋人同士だったのかもね・・・」

園子達は、絶命した2人を残しその場を後にした。

そして、ここは4階。アマレット、キュラソーと目暮組との戦いは、すでに終結していた。

アマレット、キュラソーは、完全に絶命している。彼女達は自分達の有り余るパワーを抑えきれず、爆発によって自滅したのだった。目暮達は、先に進んでいった。

一方、2階を進んでいた蘭達は、アニゼットこと雷薙に出くわしていた。

雷薙「あらら、こんなところで会っちゃうなんてね・・・」

蘭「あなたも、黒の組織の構成員・・・？」

雷薙「そうよ。アタシはアニゼット。黒の組織のナイトクラスの1人・・・」

蘭、平次、和葉、快斗、青子は身構えた。

雷薙「心配しなくてもいいわよ。アタシはあなた達の味方だから・・・」

・

平次「味方やと・・・？」

雷薙「そうよ。アタシは今、2人を助けるためにルーク兵とビショップ兵を数人味方につけたところなの・・・さあみんな、出てきて！！」

雷薙が指をパチンと鳴らすと、ルーク兵とビショップ兵数人が出てきた。

雷薙「この子達はアタシの味方よ。さあ、蘭さんはアタシと一緒に来て。」

平次「オレらは？」

雷薙「あなた達は、この子達と一緒に行って。あの方とパンドラは別の所にいるから。」

和葉「アタシらは、その2人を倒せばええんやな？」

雷薙「そうよ。あの方とパンドラを倒さないかぎり、黒の組織は壊滅しないわ!!」

快斗「わかった、行くぞ青子、和葉ちゃん、服部!!」

快斗、平次、青子、和葉は、ルーク兵とビショップ兵数人と共に走っていった。

蘭「さあ、私達も行きましょう。アニゼットさん、案内して!!」

雷薙「こつちよ、蘭さん!!」

蘭と雷薙は、地下室の一番奥の部屋に着いた。

ジン「待ってたぜ、毛利蘭・・・1人で来たようだな・・・」

蘭「あなたがジンね・・・コナン君と哀ちゃん・・・イヤ・・・新一と志保ちゃんはどこにいるの？」

ジン「フフフ・・・ここに・・・」

ジンは奥の扉を開けた。そこには縛られたコナンと哀がいた。2人ともグッタリしている。

蘭「新一・・・志保ちゃん・・・」

コナン・哀「ん~~~~~ん~~~~~」

蘭「待ってて!!今助けるわ!!」

ジン「おっと、そうはいかないな・・・」

ジンは蘭に拳銃を突きつけた。

蘭「ジン・・・いったい何のつもり？」

ジン「コイツらは新薬「パンドラ」の実験台だ・・・今渡すわけにはいかない・・・」

ジンはそう言うのと、蘭に向かって発砲してきた。蘭は、それを軽々とかわす。

蘭「ジン・・・契約違反でしょ？昨日の電話では、「今日の午後4時までここに来い」としか言っただけだよ。」

ジン「フン・・・それはそれだ。」

蘭「卑怯者・・・」

ジン「フフフ・・・」

蘭「ジン、新一と志保ちゃんを返してもらわよ。」

ジン「フン・・・オマエにオレが倒せるかな？」

ジンと蘭は、正面からぶつかりあった。

蘭「ジン、さっき言っただけの実験台って、どういう事？」

ジン「フフフ・・・まあいい。教えてやろう・・・我々組織が開発した新薬「パンドラ」はな、これまで誰もなしえなかった夢、「不老不死」の願いを叶える事ができる奇跡の薬なんだ・・・そして、その実験台にこの2人が選ばれたという事だ・・・」

ジンの言葉に、蘭は驚愕している。

蘭「不老不死って事は・・・まさか、あなた達が2人を誘拐した目的は・・・殺すためなんかじゃなく・・・」

雷薙「「永遠の人質」ね・・・」

雷薙が言葉を発した。

雷薙「新一君と志保ちゃんがパンドラの作用によって不老不死になれば、黒の組織は永久に2人を人質にしておける・・・しかも子供のままだから、どんな悪事も自由自在になる・・・悪魔のような、極秘プロジェクトね・・・。ジン・・・あなたがアタシの腕に雷縄印の呪いをかけたのは、「アタシを逃がさないため」が第一の理由

よね・・・？でも・・・それよりもっと具体的な理由があったんじゃないの？たとえば・・・」

ジン「オマエにパンドラを飲ませ、不老不死の体にするためにオマエに雷縄印をつけた・・・」という事か？その通りだよ、雷薙・・・」

雷薙「そ、そんな・・・！！」

雷薙は泣き崩れた。

雷薙「でも・・・そんなジンでも、アタシは好き・・・」

蘭「ジン・・・あなたのそのねじ曲がった根性・・・この私がたたき直してあげるわ！！」

蘭はジンに向かっていった。ジンは愛用のベレッタを乱射するが、蘭には当たらない。蘭は少しずつではあるが、確実にジンに打撃を加えていく。

ジン「ぐ・・・あ・・・」

ジンは、少しずつ蘭に追い詰められていた。

蘭「ジン、トロピカルランドの「ジェットコースター殺人事件」で、あなたとウォッカに会ったその日から、私達の運命は決まっていたのかもね・・・？こうやって、ここで戦うという運命が・・・」

ジン「フッフ・・・そうだな・・・まさかあの時新一にすがりついて泣きじゃくっていた女が、オレをここまで追い詰めるとは思わなかったよ・・・」

蘭「ジン・・・志保ちゃんの行方を執拗しつように追っていたのは、彼女の事が好きだったからでしょ？でもね、しよせん黒と黒が混ざっても、黒にしなければならないのよ？私と新一・・・白と白が混ざっても、白にしかないようにね。同じ色の者同士は、結ばれない運命なのよ・・・」

ジン「フ・・・しかし雷薙は、もともと白だった女だ・・・違う色の者同士は・・・必ずいつか結ばれるのさ・・・」

蘭「そうね。もともと敵同士だった新一と志保ちゃんが、今こうして両想いの恋人同士になっているように・・・」

弾丸を放てるなんて・・・」

ジン「オマエもやるじゃねえか・・・一瞬のうちに、八不打に打撃を入れるとはな・・・ゴホッ！！ゲホッ！！ガホッ！！！！ぐああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

蘭もジンも、血がかなり流れ落ちている。

ジン「く・・・やはりオマエは強かったなあ・・・オレはもう体がもたん・・・オマエの勝ちだ・・・あばよ・・・工藤新一、毛利蘭、シェリー・・・雷薙・・・愛してた・・・よ・・・」

ジンはそう言つと、そのまま倒れ込んだ。蘭はコナンと哀に駆け寄り、縄と布を解いた。

蘭「新一、志保ちゃん！大丈夫？」

コナン「蘭・・・ありがとう・・・」

哀「蘭さん、ありがとう・・・」

蘭「新一・・・ジンはどうなったの・・・？」

コナンは横たわっているジンを見た。ジンは完全に絶命している。

コナン「死んだよ・・・急所の八不打に完全に入ってね・・・」

蘭「そう・・・何もかも終わったのね・・・ゴホッ！！ゲホッ！！ガホッ！！！！」

コナン「蘭、大丈夫か？すぐに病院に運ぶから・・・」

蘭「ダメよ・・・もう私は助からないわ・・・どのみち私はこのような運命だったのよ・・・」

哀「そんな・・・そんな・・・」

雷薙「こんなの・・・こんな別れ方、悲しすぎるよ・・・」

哀と雷薙、和葉達は、涙を流していた。平次達も、全員うつむいている。

蘭「新一・・・私、天国ですつと新一達を見守っているから・・・志保ちゃんを必ず幸せにしてあげてね・・・さようなら・・・新一・・・」

パタッ・・・。

コナン「おい、蘭！！目を覚ませよ、蘭！！……ら……」
蘭はそのまま絶命した……。

コナン「くそぉ……ちくしょお~~~~~~~~~
~~~~~~~~~っ!!!!」

コナンの黒の組織との戦いは、今終止符を打った……。

## 決戦！！黒の組織・・・悲しい犠牲（後書き）

どうもこんにちは、ユーリと申します。こんな小説をここまで読んでくださった、ありがとうございます。

実は、エピソードごとに後書きを書くつもりだったのですが、焦って投稿したせいで忘れていました（おいおい・・・）

そういうわけで、このエピソード5から、過去のエピソードのネタバレと会話をのせようと思います。では最初なので、エピソード1、2、3のネタバレと会話を・・・

エピソード1は、タイトルの通りコナンと哀がさらわれる話でした。ではここで、オリキャラの名前の由来を書こうと思います。

まず、物語に深く関わっている女の子、風魔雷薙ですが、この「風魔」という名前は、戦国時代にいた忍者、風魔小太郎がモデルになっています。いちおう辞書でも見つかりますが、さほど有名人ではないらしく、のっている辞書が少なめです・・・興味がある方は探してみてください。

次に、構成員の名前ですが、全部本当にあるお酒です。では、そのお酒を紹介しましょう。

アニゼットは、アニスの香りをつけたリキュールの1つです。

キュラソーは、蒸留酒にオレンジの皮やその他の香料成分を配合した甘いリキュールです。

アマレットは、アーモンド風味のリキュールです。

シードルは、原作に出ていたカルバドスと同じく、リンゴのお酒です。

ボルドーは、フランスのボルドー産のワインです。

バーボン、トウモロコシ・ライ麦を主原料とするウイスキーです。

コナン「なんか、酒の工場みたいだな。」

哀「いいじゃない？お酒の勉強にもなるし・・・」

コナン「そうだな・・・」

エピソード2では、新たにマンハッタンという男が現れました。  
ちなみにマンハッタンとは、ベルモットとウイスキーなどを混ぜて  
作るカクテルの名前です。

コナン「増えたな・・・」

哀「ええ、そうね・・・」

コナン「次も出るらしいぜ。」

エピソード3では、本堂瑛祐がマジ強だったのに驚いた方もいたで  
しょう。これは私の設定です。

また、園子の宝石の知識は、やはり財閥の令嬢だからって事で・・・  
小五郎、英理と幼なじみだったマンハッタン。悲しい戦いになりま  
したね。

コナン「今回は悲しい戦いになったな。」

哀「そうね。」

コナン「次回は女の戦いが勃発するらしいぜ。」

哀「工藤君・・・私、怖いわ・・・」

まあ、こんな感じです。エピソード6では4、5を紹介するので、  
お楽しみに・・・

## 初恋の人・・・そして未来へ

黒の組織との戦いは終わった・・・ナイトクラスの構成員は雷薙、琴美、シードル、バーボンをのぞいて全員が絶命し、下級兵は一斉検挙され、あの方とパンドラは逮捕される前に自決、ジンも蘭と相打ちになって絶命した・・・。オレや哀を始め、多くの人が蘭の死を悲しんだ。特に瑛祐は蘭に惚れていたらしく、告別式で大泣きしていたが、その後琴美と結婚したらしい。赤井さんは、蘭の顔に美さんの顔を重ね合わせていたらしく「やはりムチャはするモンじゃないな」と涙を流していた。園子は大親友を亡くした事で号泣したが、京極さんになぐさめられ1ヶ月後にプロポーズされた。服部も和葉ちゃんにプロポーズし、結婚する予定だという。快斗は自分が追っていた黒の組織の兄弟組織を倒し、パンドラが含まれた宝石を見つけ出す事ができ、パンドラを悪用されないように破壊した。それによってもう怪盗キッドをする必要もなくなり、2ヶ月後青子ちゃんにプロポーズしたらしい。オレと哀は、解毒剤で工藤新一と宮野志保の姿に戻り、江戸川コナンと灰原哀は転校という形で米花町から消滅した・・・。そして1年後・・・。

夏の日、米花町を、新一と志保が歩いていた。新一は帝丹高校に復帰し、志保も新一に説得されて帝丹高校に転校した。2人がつき合っている事は園子がクラスメイトに言いふらしたらしく、2人は登校のたびにクラスメイトに冷やかされていた。今日は夏休み最後の日・・・2人は7月中に夏期休暇の宿題を終わらせ、毎日デートを楽しんでいた。今日はトロピカルランドに遊びに行く予定で、今はその途中だった。

志保「ねえ新一君、新一君の初恋の人ってどんな人だったの？やっ



ぱり蘭さん？」

志保は新一に初恋について聞いてきた。

新一「初恋の人か・・・期待してるトコ悪いけど蘭じゃないぜ？」

志保「蘭さんじゃないんだ・・・じゃああの内田麻美さんは？」

新一「園子に聞いただろ？あれは麻美さんがオレにホレてたんだよ・

・・・」

志保「じゃあ、あなたの初恋の人って誰なのよ？」

志保は新一にズイズイと近寄ってくる。

新一「あーもう、わかった！教えてやるよ！その代わりにオマエも教えてるよ？」

志保「うん、いいよ！」

志保の反応はともカワイらしく、新一は思わず見とれてしまった。新一「オレの初恋の人・・・その子は名前も知らないカワイイ女の子だったんだ・・・アメリカで出会って、何度かデートして・・・事件にも巻き込まれて・・・その子を助け出して、キスを1回だけして・・・結局その子にはオレの気持ちを伝えられなかったんだ・・・」

志保「私の初恋の人・・・その子は活発で、やさしい男の子だったわ・・・本名も知らなくて、ずっと愛称で呼んでた・・・何度かデートもしたっけ・・・私が事件に巻き込まれた時、その子は危険もかえりみず私を助けてくれたの・・・1回だけキスをしたけど、結局その子には気持ちを伝えられなかったっけ・・・」

新一と志保は初恋について教えあった後、まさか・・・という顔をしていた。

話は3年前にさかのぼる・・・。

アメリカ・・・ロサンゼルス公園に、1人の少年と2人の大人が

来ていた。工藤優作とその妻有希子、そして2人の息子の新一である。14歳の新一はサッカーボールを片手に、早くサッカーがしたいよとはしゃいでいた。すると新一の眼前に、1人の少女が写った。赤みがかった茶髪のウェーブヘアのその子こそ、宮野志保……しかし、この時はまだお互い名前を知らなかった。

新一「母さん、ボクここでサッカーしてるね！」

有希子「いいわよ、新ちゃん！私はこの人と散歩に行ってくるから……」

優作と有希子が去っていくと、新一は志保に歩み寄った。

新一「こんにちは！」

志保「あ、こんにちは……」

新一の挨拶に志保は少し驚いたが、すぐに落ち着いて彼に話しかけた。

志保「こんにちは！あなたサッカーをしにきたの？だったら私が相手になってあげるよ！」

新一「ありがとー！君の名前は？」

志保「わ、私の名前は……今は言えないの……」

新一「そう……じゃあ、アイちゃんってどう？」

志保「アイ……ちゃん……？」

新一「君の瞳、とってもキレイでカワイイでしょ？だからEYEでアイちゃん！」

志保「へー、あなた英語ができるんだ……カワイイ名前だわ。ありがと、シン君！」

新一「シン……君……？」

志保「さつき、あなたの母親が、「シンちゃん」って言ってたでしょ？だからシン君！」

新一「君もいいセンスしてるね。じゃあ遊ぼう！アイちゃん！」

志保「いいよ、シン君！」

初対面にもかかわらず、新一と志保は友達のように仲が良かった。

さて、ここからは話の都合上（つーか作者の考え？）、「シン」と「アイ」でいく事にする。

シン「アイちゃん、サッカー上手だね！とても初めてとは思えないよ！」

アイ「シン君の教え方がうまいからよ！」  
それから数時間後・・・。

シン「あ、もうこんな時間だ！ボク今日は帰るよ。」  
アイ「明日もここで待ってるね、シン君。」

シンは宿泊先のストーンブリッジ・ホテルの1人部屋で、アイの事を考えていた。

シン「アイちゃん、カワイかったなあ・・・も、もしかして、これが初恋って事なのかな？」

同じ頃、アイもホテルでシンの事を考えていた。

アイ「シン君、かっこいいしスゴくやさしいなあ・・・も、もしかして、これが初恋なの？」

次の日も、その次の日も、シンとアイは仲良く遊んだ。そしてある日、それぞれの夢について語り始めた。

アイ「ねえ、シン君は、大きくなったら何になりたいの？」

シン「ボクは、大きくなったら探偵になる・・・そして、推理小説家の父さんに負けないような名探偵になるんだ！アイちゃんは？」

アイ「私は、大きくなったら科学者になる・・・そして、お父さんが開発していた薬を完成させて、世界の人々を救えるような研究をするんだ！」

シン「アイちゃんなら、きつとなれるよ！」

アイ「ありがと！シン君も絶対なれるわ！」

シン「そうだアイちゃん、これあげる！」

アイ「シン君、これは何？」

シン「どんなピンチも乗り越えられるお守りだよ！」

アイ「ありがと、大事にするわ！」

そして、何日か過ぎたある日、事件は起こった。

今日はシンが日本に帰る日。アイはいつもの公園に向かうため、やや早足で走っていた。

アイ「今日シン君が帰っちゃうんだよね。今日この機会を逃したら、きつと後悔する・・・私の気持ちをシン君に告白しなきゃ・・・」  
アイは近道をするため、路地裏に入り込んだ。しかし、そのアイを背後から見張っている男がいた。

シンは公園で、アメリカの新聞を読みながらアイを待っていた。

シン「アイちゃん遅いなあ・・・今日ボク帰っちゃうから、ボクの気持ちをアイちゃんに伝えておかなきゃ・・・ん？」

シンが目をつけたのは、ある事件の記事だった。

シン「なにに、女子高生連続誘拐殺人事件・・・？ああ、父さんがラディッシュ警部に捜査の協力を頼まれた事件か・・・まだ捕まっていなかったんだ犯人・・・ついに15人目の犠牲者が出た、か・・・  
・そういえば、アイちゃん遅いなあ。あれを使ってみるかな・・・」  
そう言うのと、シンはあるモノのスイッチを入れ、走り出した。

シンが走り出した頃、アイはある部屋で目を覚ました。

アイ「ん・・・うう・・・頭がクラクラする・・・どうして私、こんな所に・・・？そうだね、確か近道しようとして路地裏に入った



構イタいんだぜ!!!」

そう言うと、シンはサッカーボールを蹴り飛ばした。ボールは男に当たり、男はあえなく吹っ飛ぶ。シンはアイに駆け寄ると、ガムテープと縄を解いた。

シン「アイちゃん、大丈夫？」

アイ「シン君！ありがと〜！」

アイは思わず、シンに抱きつきキスをしてしまった。シンはそんなアイを抱きしめる。

その後、シンの通報で駆けつけた警察により、男は逮捕された。しかし、アイもシンも結局自分の気持ちを伝える事はできなかった。そして時は流れ、2人は再会した・・・。

新一「そうだったんだ・・・オレの初恋の人はオマエだったんだよ、アイちゃん!!」

志保「やっと再会できたのね・・・私の初恋の人、シン君・・・!!」

2人は抱き合い、熱いキスを交わした・・・。

新一「志保・・・」

志保「なあに？新一君・・・」

新一「明日大事な話があるから・・・逃げるんじゃねえぞ・・・」

志保「わかってる・・・逃げたりはしないわ・・・」

夏休みは終わり、新学期が始まった。

クラスメイトA「よお、工藤！新学期早々夫婦で登校かよ？」

クラスメイトB「ピューピュー!!」

新一「バーロー、なんじゃねえよ!!」

新一と志保は一緒に登校したため、またもクラスメイトに冷やかされた。

クラスメイトC「そういえば、あのジョディ先生、また戻ってきたんだってよ!!」

新一「あのゲームー先生・・・何しに戻ってきたんだ・・・？ヤケに人気高かったからな・・・」

志保「ちよつと・・・私まだあの話、聞いてないんだけど・・・」

新一「・・・話？」

志保「ホラ、何か大事な話があるって言ってたでしょ？」

新一「ああ、その話なら・・・」

新一は志保に近づき、小声で話す。

新一「あのな・・・ボソボソ・・・」

志保「・・・え？」

新一「え・・・」

案の定、みんなに聞かれてしまっている。

新一「オマエらなあ・・・人の話を盗み聞きしてんじゃねえ！！」

クラスメイトD「あ、助けて奥さん！」

クラスメイトE「ダンナが暴れてますう！！」

志保（・・・今夜8時、米花センタービル・・・展望レストラン？）

夜8時・・・新一と志保は、タクシーから降りて米花センタービルに向かった。新一は、何かの小箱を上着に入れて・・・。

志保「ちよつと大丈夫なの？ここ高そうよ？」

新一「心配すんなよ、父さんのカード持ってきたから・・・」

志保「この道楽息子！！」

新一「バーロー・・・息子ほつたらかして外国に行ってる親の方が、よっぽど道楽だよ！！」

新一と志保は、1年前の新一・蘭とまったく同じ会話をしている。  
（詳しくは単行本26巻参照）

志保「それで？何なの話って・・・」

新一「あ、ああ・・・話ってのは・・・」

志保「・・・ん？」

新一「は・・・話ってのは・・・」





アアアア~~~~ツ!!!」

志保「な、何？今の悲鳴・・・」

新一「どうせ誰かがゴキブリでも見つけたんだろ？気にする事は・・・」

「おい、大変だぞ！！エレベーターの中で人が死んでるってよ！！」

「警察は呼んだのかよ!？」

新一「あ、だからオレが話したかったのは・・・」

「拳銃だ拳銃！！会社の社長が頭を撃ち抜かれてるらしいぜ!!」

新一「つ、つまりだな・・・」

志保「・・・ムリしちゃって・・・」

新一「・・・え？」

志保「事件の事が気になってしょうがないクセに・・・」

新一「いや・・・」

志保「私は誰かさんと違って、逃げも隠れもしないから、さっさと行ってきなさいよ・・・探偵さん？」

新一「・・・」

志保「ほーら！！私の気が変わらないうちに行っただ行っただ!!」

新一「し、志保・・・悪いな・・・すぐ戻ってくるからよ!!」

そう言つと、新一は走っていった。志保はそんな新一を微笑みながら見ていた。

現場では、目暮警視と高木警部が現場検証をしていた。新一は2人に合流した。

新一「目暮警視~~~~!!」

目暮「おお、新一君じゃないか！久しぶりだな~~~~!!いつ警視庁に配属だ?」

新一「来年高校を卒業して、しばらく落ち着いてからにする予定です・・・」

そつ、新一は警視庁捜査一課に配属される事が正式に決まっている

のだ。目暮としては、優秀な新一には1日も早く来て欲しいというのが本音だったりする。

新一「高木警部も元気そうで何よりです！佐藤警部は？」

目暮「佐藤君は、赤ん坊の世話で休暇を取っておるよ・・・」

新一「え？それってまさか2人の・・・？」

そう、高木と佐藤は去年結婚して、今年子供も生まれていたのだ。あの時はみんな2人を祝福したつけ。陰で白鳥警部が号泣して、それを由美さんがなぐさめていたけど・・・。

新一「そういえば、小五郎さんはどうしてます？」

目暮「毛利君かね？捜査一課に戻ってきたよ・・・君がコナン君だった時の指導が効いたらしくてな、次々と難事件を解決しておるよ・・・そうそう、英理さんとも仲直りして、この間蘭君の妹に当たる子が生まれたそうだよ・・・」

新一「え？あの年齢で・・・？ハハハ・・・」

高木「しかしどうして君がここに？」

新一「志保と2人で食事してたんですよ・・・」

目暮「まったく・・・高校生2人がこんな高級レストランの連なるフロアで食事とは時代も変わったモンだ・・・」

新一「いえ、ここにしたのは・・・ちよつとワケありだね・・・」

新一はそう言いながら、現場の捜査に加わった。

同じ頃、志保は新一の「大事な話」についてあれこれ考えていた。

志保（何だろ・・・新一君が私に大事な話って・・・何かしら？・・・もしかして・・・）

新一「オマエ、この夏休みの間に太ったんじゃないか？」

志保（あ、ありうる・・・最近ちよつとウエスト、ヤバぎみだし・・・でも、わざわざ食事に誘ってそれはないわよねえ・・・）

志保がそんな事を考えていると、ウエイトレスがデザートを運んできた。

「お待たせしました・・・」

志保「あ、連れが戻ってくるまで、デザート待ってもらえます？さ  
つきの悲鳴聞いて飛んで行っちゃったんです！！でも彼、探偵で、  
たぶんすぐに解決して来ると思いますから・・・」

「ウフツ！！かしこまりました・・・」

志保「・・・え？何ですか？」

「あ、ごめんなさい・・・前のソムリエに聞いた伝説のカップルに  
あなた達があんまりそっくりだったから・・・席もちょうどこのテ  
ーブル・・・もう20年ぐらい前の話だそうだけど、その20年前  
の彼も探偵でね・・・事件を解いて戻るなり大声で言っちゃったら  
しいから・・・あなたも覚悟しておいた方がいいわよ！！」

志保「・・・言っちゃったって？」

「プロポーズよ！プロポーズ！！」

志保「・・・えっ！？」

「じゃあ、がんばってねー！！」

志保（プ、プロポーズウ？ま、まさか・・・まさか新一君・・・）

同じ頃、新一はトリックを暴き、犯人を割り出していた。

新一「・・・以上の点から考えて、被害者を射殺したのはあなたし  
かないんですよ！！！」

「負けました・・・全てあなたの推理通りです・・・」

犯人は警察に連行されていった。

目暮「いやあ、相変わらず頼もしいねえ、君は！！」

新一「いえいえ・・・」

目暮「どうかね？久しぶりに被疑者の事情聴取に立ち会わんか？」

新一「いや、ボクは遠慮しておきます・・・まだ、ヤボ用が残つて  
ますから・・・」

目暮「そうか・・・じゃあ行くか、高木君！！」

高木「はい！」

新一「さよなら、目暮警視、高木警部！！」

目暮「志保君によろしくなー！！」

目暮と高木が去った後、新一は志保の元へと走り出した。

「ねえ、聞いた？事件解決したらしいわよ！」

志保「え？ホントですか？」

「いよいよ会えちゃうわね！！あなたの彼に！！」

志保「アハハ・・・そんな・・・」

その時、新一が走ってきた。

新一「志保！！！！」

志保「し、新一君！！」

新一「待たせたな、志保・・・」

志保「そんな・・・大丈夫、ちゃんと待ってたよ・・・」

新一「志保、オマエに話がある！！聞いてくれ！！」

志保「は、はい！！！！」

新一はそう言くと、上着から小箱を取り出した。

志保「これって・・・」

新一「これ・・・結婚指輪なんだ・・・」

志保「結婚・・・指輪・・・」

新一「志保！！！！オレは・・・オマエの事が好きだ！！！！この地球上の誰よりも・・・だから・・・志保・・・オレと・・・オレと結婚してくれ！！！！」

新一は、20年前の探偵と同じように、大声で志保にプロポーズした。その言葉に志保は、目を涙でいっぱいにして答えた・・・。

志保「はい・・・喜んで・・・！！！！」

新一と志保は、ついに結婚する事になった。

志保「あ、そうだ新一君！デザート食べるでしょ？」

新一「あ、おう！」

志保「あ、すみません！メニューを・・・」

新一と志保は、運ばれてきたデザートを食べている。

志保「へー、たったそれだけの証拠でトリックも犯人も見破っちゃうなんて・・・やっぱり新一君ってスゴいんだね・・・」

新一「あ、ああ・・・まあ・・・（オレ達これで7品目だぞ・・・）」

ちなみに食事の支払いは、全部優作である。（カードが優作の物なので・・・）

志保「ところでさ、どうしてこんな高い店にしたの？ちゃんとした理由があるんだよね？」

新一「あ、ああ・・・それは・・・」

志保「まったく・・・言えないなら私が言っただけよっか？」

新一「へ？」

志保「この席は、20年前に優作さんが有希子さんに告白した場所・・・なんでしょ？」

新一「ああ、そうだよ・・・博士に聞いたなあ？」

志保「テヘツ、バレたか・・・父親のゲンをかついだってワケね・・・ちなみにさっきの告白のセリフも、小五郎さんが英理さんにプロポーズした時のマネなんでしょ？」

新一「ゲツ！なんで・・・？」

志保「これは本人から直接聞きました！」

新一「ニヤロー・・・」

志保「テヘ・・・」

新一「志保、口開けろ！オレが食べさせてやつからよ！」

志保「んもう・・・その代わり、私も食べさせるからね！」

新一と志保の談笑は、遅くまで続いた。そして、この席はのちに、「伝説のカップルのテーブル」と呼ばれ、ここで食事した恋人達は必ず結ばれるという伝説が受け継がれる事となる・・・。

## 初恋の人・・・そして未来へ（後書き）

どうも、ユーリです。今回はエピソード4と5のネタバレを書こうと思います。

エピソード4では、雷薙との戦いでベルモットが死んでしまいましたね。まあ、忍者の末裔と戦って勝てるわけがないのは私もわかってたんですが・・・

書きそびれましたが、エピソード3ではウォツカが死んだ事によってジンが涙を流すシーンを書いてみました。冷酷な彼も、やっぱり人の子なんだなあ・・・

雷薙に詰め寄られてふるえているジンのシーンを書いた時は、書きながら爆笑していました。

瑛祐が元不良だったという設定も私が入れました。

ロズゴート・バリーとヴィンセント・キース。この2人の名前は、考えるのが大変でした。

新しく出てきたギムレットとは、ジンをライムで割りシエークしたカクテルです。

コナン「いろいろあったな。」

哀「私達はまだ捕まっているのね・・・ハア・・・」

ベルモット「それより、どうして私が死んじゃうわけ？」

キャンティ「なんか、アタイ達も次回死んじゃうみたいだわ。」

コロン「出番・・・少ない・・・オレ・・・悲しい・・・」

キャンティ「アンタに「悲しい」って感情があるとは思わなかったよ。」

コロン「キャンティ・・・しばく・・・」

キャンティ「じよ、冗談だよ！コロン・・・」

次はエピソード5・・・戦いが終わったのに、なんなんでしょう？  
この寒さは・・・？

コナン「たくさん人が死んだな。」

哀「そうね。いつの世も戦乱はなくなるのね・・・ところで、  
あなた何を持ってるの？」

コナン「後書きにも出てたお酒だよ。父さんが買ってきたのをもら  
ったんだ。」

哀「ま、まさか・・・」

コナン「気づいたか。オマエにこれを飲ませるんだよ!!」

哀「や・・・やめて工藤君・・・私達はまだ未成年・・・」

コナン「つべこべ言わずに飲め～～～～～～!!」

哀「キャ～～～～～～!! 誰か助けて～～～～～～!!」

・・・コナン君、暴走してますが、ここで終わりたいと思ひ  
ます。

## 娘と息子へ・・・受け継がれる魂

オレと志保は帝丹高校を卒業後、6月に結婚した。式には多くの関係者が詰めかけ、2人を祝福してくれた。そうそう、服部と和葉ちゃん、園子と京極さん、快斗と青子ちゃんはずでに結婚して、子供も生まれたい。そして、オレと志保にも子供が生まれた・・・。

17年後・・・

???「雷斗！学校に遅れるわよ！」

雷斗「わかってるよ、哀姉・・・」

志保「哀蘭、雷斗！いつてらっしゃい！！」

哀蘭・雷斗「いつてきまーす！！！」

新一「たく、なんで双子でこうも違うんだ？哀蘭は活発でおてんばなのに、雷斗はおとなしくてよく寝坊するし・・・」

志保「あら、双子だからって同じ性格とはかぎらないのよ？あの子達は二卵性だもの・・・」

新一「志保、邪魔者もいなくなった事だし、キスしようぜ？」

志保「んもう、あなたっていつもそう！まあ、そんなトコにホレただけだね・・・」

新一と志保は、朝のキスをしていた。

今米花町を軽快に走っている少女と、遅れ気味でハアハア言っている少年・・・そう、この2人こそ、新一と志保の子供、双子の少女と少年だ。

少女の方は工藤哀蘭、クドウ アイラン17歳。活発なおてんば娘で、空手部女主将。そして今や新聞紙上を騒がせている女子高生名探偵だ。名前の由来



は、新一と志保が蘭の事を忘れないためにと、哀とくっつけてつけた名前だ。赤みがかった茶髪のウェーブヘアなど、どこことなく志保の特徴を引き継いでいる。滅多に涙を流さず、並の男子なんて軽々とやつつけてしまう。

少年の方は工藤<sup>クドウ</sup>雷斗、同じく17歳。姉と違っておとなしくてスゴい泣き虫で、拳げ句の果てにはネボスケときてる頼りない弟。でもそのひ弱さを、姉に教わった空手と剣道で補っている。推理力の方も姉に引けを取らないが、感情に流されると暴走推理をしてしまうのが玉にキズ。名前の由来は、風魔雷薙と黒羽快斗をくっつけた名前だ。

ちなみにその雷薙はどうしてるかというと、早くに出所でき、今は工藤家の家政婦を務めている。

さて、話を本題に戻そう。さっき志保は遅れると言ったが、実は今の時間は9時15分前。2人の足なら、近い帝丹高校になど楽々着けるはずだが、なぜか哀蘭達は走っていた。その理由とは、今日は帝丹高校の始業式だったからだ。哀蘭はクラス分けを楽しみに、急いでいるのである。

雷斗（たく、クラス分けでいちいちはしゃぐなんての・・・）

哀蘭「なにか言ったかなあゝ、雷斗おゝ？」

雷斗「（ゲッ！）な、何も言ってますん・・・」

雷斗は心の中で、なんでバレたんだ？と思った。実は哀蘭は耳が良く、絶対音感を持っているのだ。そして、雷斗が何か考え事をしていると微妙な音でわかってしまうらしい。地獄耳だといえば、わかりやすいだろう。つまり、哀蘭には雷斗の考えなどお見通しなのだ。

帝丹高校に着いた2人は、さっそくクラス分け発表の掲示板を見た。

哀蘭「あ、あつた！アタシの名前！クラス落ちはしてないわね。」

雷斗「ゲッ・・・また姉ちゃんと一緒だ・・・ま、しょうがねえか・

・・・」

そこに書かれていた名前は、哀蘭と雷斗、平次と和葉の子供の服部祐次と服部紅葉、快斗と青子の子供の黒羽弥生と黒羽北斗、白馬探と小泉紅子の娘の白馬朔美、桃井恵子の息子の桃井桂太、真と園子の子供の京極大和と京極撫子、高木と佐藤の息子の高木拓人・・・そして、もう1人、なつかしい名前が・・・。

哀蘭「おつはよー！」

服部祐次「おう、待つとつたで哀蘭ちゃん！！」

哀蘭「あら、アタシを待つてくれたの祐次君？」

服部紅葉「そうなんや哀蘭ちゃん！祐次つてば朝早うから哀蘭ちゃんに会える哀蘭ちゃんに会えるゆうて・・・うるそーてかなわんわ・

・・・」

黒羽弥生「それだけ祐次君が、哀蘭ちゃんを好きだつて事よ！」

黒羽北斗「そうそう！お似合いのカップルだし！」

哀蘭・祐次「／／／／／・・・／／／／／」

京極大和「おやおや、妬けますね・・・」

京極撫子「ちやかさないちやかさない！」

白馬朔美「あらあら、2人共耳まで真っ赤つか！」

桃井桂太「この2人つて昔っからこうだよね！」

高木拓人「すぐ顔に出て照れちゃうから、からかいがいがあるんだよねー。」

哀蘭・祐次「／／／／／うう・・・／／／／／」

なぜこの11人以外の人が会話に入つてこないのか？それは簡単である。哀蘭達が今いるこの教室は、英才教育の特別学級で、12人しか入れないエリートコースだからだ。しかもこの11人、小学校の時からずっと同じクラスで、一度も離れた事がないのである。それだけにこの11人は、強い絆で結ばれているのだ。

「席に着け！出席を取るぞー！！」

教室に担任が入ってきて叫ぶと、１１人は慌てて席に座る。

「今日はオマエ達に、新しいクラスメイトを紹介する！さあ、自己紹介をしてくれ！」

モウリ アゲハ  
毛利揚羽「皆さん、初めまして！アタシ、毛利揚羽と言います！なじめるかはわからないけど、仲良くしてくださいね！！」

揚羽の自己紹介に、哀蘭達は歓声を上げ快く仲間に引き入れた。そして、彼女達が揚羽を呼び込み、帝丹高校少年探偵団として活躍するようにするのは、まだもうちょっと先の話・・・。

「黒の組織との決戦！！そして・・・」完

## 娘と息子へ・・・受け継がれる魂（後書き）

ああ・・・やっと終わった・・・長かった・・・こんなに長いのを  
書いたのは久しぶりです。それでは、いよいよラストのネタバレを・  
・

エピソード6では、新一と志保のそれぞれの初恋から始まりました。  
前に2人が会っていたら・・・という感じで書いたモノです。  
ところで、小五郎と英理の話ですが、「あの年で子供産むのはいく  
らなんでもないだろ」と思いましたが、話なのでその方が面白いか  
と・・・

コナン「哀・・・大丈夫か？」

哀「私は志保よ～～～～、新一～～～～・・・」  
コナン「ヤベ、志保のヤツ酔ってやがる・・・」

さて、いよいよラストです。ここまで来たら、もはや語るモノはな  
いでしょう。

本当にありがとうございました！！  
感想もぜひ聞かせてくださいね！！



アニゼット「あら、いいわよ。」

翌日の夜、ジンと雷薙は杯戸シティホテルのレストランにいた。ジンはパスタを口に運びながら、雷薙に話しかける。

ジン「アニゼット、研究は進んでいるのか？」

アニゼット「ええ、もうAPTX4869の完全品「パンドラ」は完成させたわ・・・ところで、ジン。行方不明になっている工藤新一君とシェリーちゃんの事なんだけどね、調べてみたら、彼らがパンドラの実験台にふさわしい人間だって事がわかったのよ・・・」

ジン「本当か!？」

アニゼット「ええ。データはそろってるわ。」

ジン「あとは、本人達が見つければいいのだがな・・・」

アニゼット「・・・ん？ねえ、見て、ジン！あれ!!」

ジン「どうした、アニゼット？あ・・・」

ジンが向いた方向には、メガネをかけた少年「江戸川コナン」と、茶髪でウェーブヘアの少女「灰原哀」、そして3人の大人の男女の姿があった。どうやら、5人でここに食事に来ていたようである。

ジン「アイツらは・・・子供・・・か？」

ジンはこっそりコナンと哀の写真をカメラで撮ると、雷薙と共にその場をあとにした。

組織に戻った2人は、さっそくある事をやり始めた。それは・・・カシヤツ、カシヤツ、カシヤツ・・・。

雷薙はノートパソコンを開き、指を動かしていた。しばらくして・・・

・  
アニゼット「出たわ、ジン。組織のデータベースの、構成員のデー

タ。」

ジン「それで、どうだった・・・？」

アニゼット「完全に一致ね。あの茶髪の少女は、シェリーだわ。」

ジン「やはりそうだったか・・・ならば、もう1人のあの少年は・・・」

・」

雷薙は続いて、被験者のデータを調べてみた。数秒後、笑みを浮かべる。

アニゼット「こちらも一致。あの少年は、高校生探偵の工藤新一よ。」

・」

ジン「信じられんが、これが事実か・・・」

アニゼット「彼らも、まさかアタシ達に写真を撮られていたとは微塵も思っていないでしょうね。小学生生活が長引いて、警戒心がなくなっただけかしら？」

ジン「あるいは、オレ達に絶対勝てるという自信があるからなのか・・・」

・」

アニゼット「でも、それじゃあアタシ達からは逃れられないわね。」

ジン、ナイトクラスを全員集めて。作戦会議をするわよ。」

数分後、ジンと雷薙の周りに、ベルモット、ウォッカ、シールド、バーボン、ボルドー、キュラソー、アマレット、コロン、キャンディ、ギムレット、マンハッタン・・・黒の組織のナイトクラスが、全員集合していた。

雷薙「みんな、よく聞いてね・・・」

ジン「今から、「工藤新一とシェリー・永遠の人質計画」の作戦を発表する・・・」

それから数日後、黒の組織はコナンと哀を誘拐し、アジトにしている聖学院高校に連れてきた。コナンと哀は両手足をロープで縛られ、口をガムテープで塞がれている。

コナン・哀「うゝん、うゝん・・・」

力なくもがいている2人を見て、ジンはフツとほえんだ。

ジン（工藤新一とシエリー・・・コイツら、こんなにかわいらしい顔をしているとはな・・・フッフ・・・お似合いのカップルだよ、お2人さん・・・）

ウォツカ「アニキ、運ぶ役は誰にしますか？」

ジン「ああ、アマレット達でかまわんだろ。」

アマレット達はコナンと哀を抱え、牢屋に連れて行った。

ジンは1人、自分の部屋でうつむいていた。

ジン「なんで、アマレット達に任せてしまったんだろう・・・本当はオレがあのだ2人を運びたかった・・・ここに連れ込んで、一緒に遊びたかったのになあ・・・ハア・・・」

後悔先に立たず。ジンは、ハアーツとため息をついた。

ジン「しかたない・・・アニゼットを呼ぼう。」

ジンは雷雉を部屋に呼び、ポーカーをした。

アニゼット「2人でポーカーって、あまり盛り上がりがないものね。」

ジン「そうだな。あ、そうだアニゼット。2人に食事を持って行ってくれ。」

アニゼット「ええ、じゃあアタシが今から作って・・・」

ジン「イヤ、もう料理はできている。」

アニゼット「まさか、あなたが作ったの？」

ジン「悪いかな？」



アニゼット「悪くないわよ。あなたって、なぜか料理は得意だね・・・」

ジン「あ、そうそう、あの2人には、オレが料理を作った事はふせておいてくれよ。」

アニゼット「はいはい・・・」

雷薙は2人分の食事を持って、コナンと哀が閉じ込められている牢屋に歩いていった。

アニゼット「ジン・・・気合い入れすぎよ・・・」

雷薙はため息をついた。ジンの作った料理は、かなりの量だったからだ。

アニゼット「あの子達、食べきれるかしら・・・」

雷薙は2人を心配したが、その心配は全くなかった。

コナンと哀は、数分で全部食べてしまったのだ。

雷薙が牢屋を出ようとした時、コナンと哀の声がかかった。

コナン「雷薙さん、この料理、すごくおいしかったよ!」

哀「誰が作ったのかわかんないけど、プロ並みだわ!」

雷薙「そ、そう・・・（絶対作成者の名はバラせないわね・・・）」

こんな事を考えながら、雷薙はジンの部屋に向かった。

その頃、同じナイトクラスの面々は、それぞれの部屋でくつろいでいた。

バーボン「シールド．．．」

シールド「バーボン．．．」

シールドとバーボンは、仲良く寝ていた．．．

マンハッタン、ギムレット、キュラソーは、屋上にいた。

マンハッタン「そうか．．．毛利小五郎も来るのか．．．小五郎．．．明日こそ死体にしてやるぜ！！」

ギムレット「まあせいぜいがんばってくださいね、マンハッタン。一応エールは送ります。」

マンハッタン「ギムレット．．．オマエ．．．第1作戦のメンバーに選ばれなかった事、怒ってるらしいな。しかし今のオマエならアマレット達など．．．」

ギムレット「アタシ、怒ってません。」

キュラソー「大丈夫よマンハッタン、ギムレット！あんなヤツら、楽勝だから！！」

マンハッタン「ギムレット．．．」

キャンティとコルンは部屋で食事、アマレットは携帯ゲーム、ボルドーは宝石鑑賞、ベルモットとウォツカは部屋で寝ていた。

そして翌日．．．最終決戦は始まったのだった．．．

たぶん、これでオシマイ。

回想シーン・・・コナンと哀の正体は、なぜバレた！？（後書き）

・・・なんか、この話の回想シーンです。

たぶん、これで終わりのハズですが・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4629a/>

---

黒の組織との決戦！！そして・・・

2010年11月5日21時53分発行